



# 連続フォーラム「チヨゴリときもの」No.20

在日コリアンの過去・現在・未来

## はじめに

京都造形芸術大学客員教授 仲尾 宏

ことしの「チョゴリときもの」は、この催しの開始いらい、20周年、という節目の年でもあるので、この20年間、日本と京都で、日本社会と日本人の在日を見る目線がどのように変わってきたのか、ということを手がかりに浮かびあがらせたい、という思いがあった。

そこで子育てと学校教育の現場でなが年、在日と日本人の子どもと出会ってこられた康玲子さん、同じように20年目を迎えた「東九条マダン」の現実行委員長陳太一さん、在日高齢者の福祉センターである「エルファ」で創立いらい、さまざまな問題に取り組んでこられた鄭明愛さん、京都でキムチの製造、販売を50年にわたってつづけてこられた事業としても成功された「ほし山」の李連順さんの4人に毎年のように、それぞれの思いを語っていただいた。そして最終回は、新屋英子さんの一人しばいの上演を鑑賞させていただき、また「チョゴリときもの」の初代担当者であった鄭昌根（チョン・チャングン）さんに私をはじめたころの思い出をお聞きすることにした。

発言していただいた4人のかたがたのお話はいつものように、それぞれ日本人として考えて聞かなければならぬ課題を提示していただいた。それは本文を参照していただきたい。

新屋英子さんの一人芝居は、多くの人々に感動を与えつづけてきたが、今回も在日一世のハルモニの半生を演じられて、フォーラムでのそれぞれの報告と重ね合わせて、あらためて日本近代から現代にかけての深い歴史の裏を实感させていただいた。

この催しは、今回でひとつの節目をむかえたわけだが、今のべた日本の歴史の裏が存在し、また在日の方々がこの京都をはじめ、全国で生き抜いておられる、という現実がある限り、また形をかえてでも続けなければならぬ。

ひきつづき関係者、また多くの京都市民のかたがたのご協力をお受けして、さらに実りのある機会を創造していきたい。



# 目次

## 「チヨゴリときもの」 在日コリアンの過去・現在・未来

### 第一回

- 日本の学校教育と在日の存在
- 私のふたつの名前と東九条マダンのこと

5

### 第二回

- 福祉の現場で在日を考える
- 食文化の変化と在日

47

### 第三回

- 対談「チヨゴリときもの」20年を振り返って
- 「チヨゴリときもの」20周年記念  
新屋英子ひとり芝居「身世打鈴」しんせたりよん

83

「チヨゴリときもの」20周年によせて 寄稿文

99



第一回

■ 日本の学校教育と在日の存在

■ 私のふたつの名前と東九条マダンのこと

パネリスト

康 玲子（カン・ヨンジャ）氏

陳 太一（チン・テイル）氏

コーディネーター

仲尾 宏氏（京都造形芸術大学客員教授）

二〇一三年三月一日（金） 開催



## チヨゴリときもの

司会：ただいまより、連続フォーラム「チヨゴリときもの」を開催いたします。

今回、このフォーラムは20回目を迎えました。協会設立3周年を記念して開始しましたこのフォーラムを振り返りますとともに、今を確認し、そしてこれから考える一つの節目として今年の総合テーマを「在日の過去・現在・未来」と致しました。本日・来週と2日に亘り、4人の方にそれぞれの立場からお話いただき、最終日は20周年を記念して、新屋英子さんのひとり芝居「身世打鈴」の公演を予定しています。また、併せまして、会館2F展示室において写真展「東九条」を開催しています。在日コリアンの多く住まう東九条の変遷、そこに生きてきた人々の表情や熱意、そして、未来への思いを感じ取っていただければ幸いです。20年という時間は、長くも有り、短くも有ります。このフォーラムが開始されました1990年当初は、「国際化」という言葉が大きく謳われてきましたが、外国籍市民という言葉はほとんど耳にすることもなく、「国際」という言葉からはまだ欧米がイメージされることが多い時代でした。協会では、国外の紹介や交流と共に、日本社会内の国際化を進めていくことこそ本場の日本の国際化であるという考えのもと、多くの方のお力を得てこのフォーラムを開始致しました。その後、世界の政治や経済の流れの中で、多様な文化背景を持つ人々が多く日本で生活・定住する時代となりました。在日コリアン社会も一世から三世、四世の時代と進んでいます。これまで数回を除き、専門家でない、隣人としての一在日コリアンの意見や思いをお話しいただいてきました。このフォーラムは在日コリアンの思いや意見をお聞きして理解を深めることを目的にして実施しておりますが、これからは、もう一歩進んで在日コリアンでもある、「一人の人」「一人の女性」「一人の男性」からの発言として聞いていただければとも願っております。それがかなうならば、これまでの20年の時間を少し皆様と分け合う

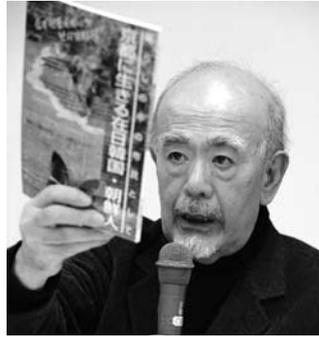
ことができるのではないかと思います。社会全体が、多様な生き方を受け入れ、真に成熟していくために、日本人も在日コリアンも他の外国籍の人々も、皆が何をしていくことが望まれるか、と一緒に考えていきたいと思えます。

本日のパネリストをご紹介します。最初にお話しただくのは康玲子（カン・ヨンジャ）様です。康様は神戸のご出身で、京都大学大学院をご卒業後、長らく主婦でいらつしやいました。2005年から京都市の小学校において学び支援の講師として従事され、現在は市内の高校の教員として教壇に立っていらつしやいます。ご著書もあり、会館図書資料室で閲覧していただくこともできます。

2番目にお話しいただきますのは陳太一（チン・テイル）様です。陳様は、お手元のご紹介にもありますように日本国籍でいらつしやいます。現在、京都市交通局で市バス乗務員として日々お世話になっていきます。在日コリアンが多く住まう東九条で、現在ではコリアンのみでなく、日本人はもちろん、外国からのニューカマーや障がいを持つ人々も一緒に楽しめる地域のお祭り「東九条マダン」代表として活躍されています。

そしてコーディネーターは、フォーラム開始よりつとめていただいておりますおなじみの京都造形大学客員教授仲尾宏先生です。先生には第1回より大変お世話になっております。まだまだ在日コリアンへの理解が進んでいなかった時から、在日コリアンの代弁者として、さまざまな場面で、国内国際化の推進に大きく寄与されてまいりました。

お時間の関係もございますので、ご紹介はこの辺にさせていただきます。さっそく始めさせていただきます。なお、一部が終了いたしましたら、皆様からのご質問、ご意見をもとに第二部の質疑応答に繋げてまいります。お手元の用紙をご利用ください。また、途中で事業記録のため、後ろから時々写真を撮らせていただく場合がございます。ご理解賜ります様お願い申し上げます。それでは、先生、よろしく願ひいたします。



仲尾 宏氏

仲尾 宏：皆さん、こんにちは。今日はあいにくの天気になりそうですけれども、たくさんの方々にお集まりいただきありがとうございます。ただ今司会の岡村さんから、今年はずせこのようなテーマにしたのかというご説明がありました。私もあまり意識しないで毎年コーディネーターを務めてまいりましたが、いつの間にか20年ということになり、かえってびっくりいたしております。その間非常に多くの在日の方々、一部そうでない方も含めて登場していただきまして、生の声を私たち京都市民が共有することができたというのはとても良かったのではないかと思います。

お手元に年表がございますが、20回目を迎えるにあたり、この20年間に世界で、日本で、そして京都で在日の取り扱いがどのように変わってきたのか、あるいは市民の目線がどのように変わってきたのか、あるいは国や行政がどのように事態を変えようとしているのかということを考えてまとめてみました。なかなか簡潔にまとめるのは難しいということが分かりました。これは、次回も次々回もお持ちいただきたいんですけども、20年前というと1992年ということになります。今まで2012年度ですから92年であります。その時に第一回「チョゴリときもの」が開催されました。東九条マダンも同じくそうです。また京都市教育委員会が外国人教育基本方針を策定した。そういう意味で92年はひとつのメモリアルな年であったんですが。その前の89年には京都市国際交流協会、この会館の運営母体である団体が財団法人として設立されております。それから、南北コアの国連同時加盟といった大きな出来事もございました。そういう中で京都の外国籍市民といえば在日がいちばん多い。その人たちの問題を中心に考えなくてどうするという議論を行政の方を含めてやってくる中でこのチョゴリときものが始まったわけでございます。

それから、1994年を見ていただきますと、この国際交流協会が『暮らしの中の市民として京都に生きる在日韓国・朝鮮人』という冊子を発行いたしました。ここにございます。ご覧になってない方もあるかと思いますが、まだ多少余裕があるようですので、有料ですけれども受付でお問い合わせください。私はこれを作る編集委員会の委員長をさせていただきました。その時にこの冊子のタイトルのどうするかという議論があったんです。「京都に生きる在日韓国・朝鮮人」は、難なく決まったんですね。ところが、その編集委員会のお一人でいらっしゃる今は希望の家の保育園の園長の崔忠植（チェ・シユンシク）さんが「暮らしの中の市民として」というサブタイトルをどうしても入れてほしいと言われました。なぜかというところ、今までは京都市民として認められてこなかったじゃないか、ほとんど市民としての権利がなかったじゃないか」ということを強く言われたのが印象に残っております。それは、この年表を見ても分かることですが、高齢者、障害者の方が無年金であるとか、地方参政権がないとか、その他いろんなことがございました。京都市の公務員についても窓口は非常に狭かった。そういうことがこの交流協会が発足し、京都市が国際化推進室として大綱を作っているいろんな施策をする中で少しずつ改善されてきたということが見てとれるんじゃないかと思えます。

しかし、そういう年表のことばかり言っても仕方がないので、今日から3回にわたって在日の方がどのような変化をご自分として受け止められ、あるいはどのように希望を見出そうとされているのか。あるいは、まだまだ変わっていない日本社会のあり様というものについて、どういうまなざしを向けておられるのか。そういうところをお話いただくことにいたしました。今日は、最初に先ほどご紹介のあった康玲子（カン・ヨンジャ）さんから約25分お話をいただきます。よろしくお願ひします。



カン・ヨンジャ氏

康玲子（カン・ヨンジャ）：アンニョンハシムニカ？こんにちは。今ご紹介にあずかりました康玲子（カン・ヨンジャ）と申します。今日はよろしくお願ひいたします。「在日コリアンの過去・現在・未来」ということで、私にとつて「過去」といいますのは、イメージとしてはもつと古い時代のことです。私の祖父母が朝鮮半島から海を渡って日本にやって来た、その時代のことですとか、日本に来てからその後いろんな苦労をする中で私の父と母を祖父母が育ててくれたわけですよ。そして、その父と母が会って私が生まれて。私は、子どもの頃には自分が朝鮮人に生まれたことを喜ぶことができません、谷山玲子（タニヤマレイコ）という日本名で学校に通っておりまして、康玲子（カン・ヨンジャ）というこの名前を取り戻すため、それだけのためにずいぶん遠回りをしなければいけなかつたような、そんな人間なんですけれども。そのあたりの話が私にとつては「過去」だと今まで思っていたんですね。そういう話はこの本（康玲子『私には浅田先生がいた』三一書房）に詳しく書いてありますので関心のおありの方は読んでいただければ嬉しいなと思いますけれども。

でも今日のテーマの「過去」というのは、もつと近い過去なんです。この「チョゴリときもの」という連続フォーラムが20周年を迎えられるということで、20年前と現在と比べて考えてみてくださいという宿題をいただきました。私には今28歳と25歳と21歳の3人の娘がいるんですけども、20年前といえますと、まさにその3人の子どもたちの子育て真つ最中という、そういう時であったなあということを出します。仲尾先生にこの年表をご用意いただいたんですけれども、約20年前、91年にいちばん上の子どもが小学校へ入学しました。そして、子どもが小学校へ入ったと思ったら92年には京都市が外国人教育方針というものをを出してくださいだった、ちょうどそういうタイミングだったんです。子どもを学校に通わせながら、いろんな悩みを持っていたなあというふうに思い出します。子

どもは最初から朝鮮人らしい名前ひとつで思つて「らしい」名前を付けました。私も康玲子（カン・ヨンジャ）ですと自己紹介させていただきましたけれども、子どももこういうふうになつとカタカナでふりがなを付けるような感じの名前で学校に通わせたわけです。20年前はまだ韓流ブームがなかったんですね。だから、おかしな名前だということ、ずい分からかわれるとかいじめと言つてもいいようなことがたくさんあつたようです。小学校1年生の子どもが「もう明日から学校には行きたないねん」ということを私に訴えまして、親として本当に大きなショックを受けたというようなことがちょうど20年前にあつたんです。

けれども、そういう悩みを持った者同士が集まつて、「メアリ会」という、その年表にもわざわざ「91年メアリ会発足」と入れていただいたんですが、こんな年表に書いていただいたら、恥ずかしいような本場に小さなグループなんですけれども、私たちはそういう保護者の会というのをつくつて、横のつながりというんですか、同じ悩みを持つ者同士でもつとこういうふうな学校の先生にアドバイスしたらいいんじゃないかとか、学校でもつとこういふことをしてくださいと言えばいいんじゃないかということ、そういう活動をするようになりました。

ちょうど同じタイミングで京都市のほうでも外国人教育方針というものを策定されて、これからは公教育の中で少なくとも京都市の教育においては外国人教育というものをやるんだと。日本の学校には日本人の子どもだけが来ているんじゃない、たくさん外国人の子どもも一緒に学んでいるわけだから、そういう子どもたちとお互いにお互いの人権を大切にしながら一緒に学んでいくことを子どもたちに教えていかないといけないという方針を京都市教育委員会が出してくださつたんですね。私たちは、それがちょうどいいタイミングで出て嬉しいと思いましたが、本当はそれ以前に、先ほどもお名前が挙がりましたが、崔（チエ）先生とかですね、いろんな方が運動をしてこられた、その成果であつたわけです。いつまでも学校教育の場で、在日朝鮮人の子どもがたくさんいるのにその子どもがまるでないかのように、皆日本人であるかのように教育をやっているのはよくないということで、こ

の方針が出たんですね。

ですから、それからは、じゃあこんなりっぱな方針があるんだから、これを学校現場でどうぞ生かしてください。私の子どもはこんなことではじめられたんです。もつと当たり前前に、そんな在日朝鮮人の子がね、カン何某という名前の子が来てたら、変な名前やなあ、おかしい名前やなああってからかうんじゃないかって、あつ！そういう人もいるんやね、あつ！カンさんはおじいちゃん、おばあちゃんが朝鮮から来た人なんか、韓国から来た人なんか、そういうお友達もいるんやなあということをもつと子どもたちに教えてあげてくださいと。上の子が小学校3年生の時学校で「韓国帰れ！」と言われて泣いて帰って来たこともあったんですね。私も今から思えばまだうぶなお母さんだったんです。今はもう大丈夫ですけども、その時は子どもと一緒に泣いてしまったんですよ。「韓国帰れ！」と言われたらね、今から帰っても、家も親戚もないですしね。言葉も日本語しか喋れませんしね。そういう経験も通して、「先生、学校で歴史もちゃんと教えてくださいね、どういう事情で、私たちが日本に来たのか、そしてこの子が今日の学校で日本人のお友達と机を並べるようになったのかということをきちんと教えてくださったらそんな言葉はきつと出てこないはずなんではないのかなと思うんですけど。」と学校の先生方をお願いをしに行くようになりました。

実は、私たちがお願いする前から学校のほうではそういう教育に一生懸命取り組んでくださっている先生方もたくさんおられました。当時は「全朝教」と言っていたんです。全朝教というのは全国在日朝鮮人教育研究協議会です。今の時代は、中国人、ブラジル人、フィリピン人、ペルー人など、朝鮮人、韓国人以外のたくさんの国籍の子どもたちがいますから、全国在日外国人教育研究協議会すなわち「全外教」というふうに名前が変わっています。

そういう先生方が集まったこの全朝教が、例えばこういう冊子を作って学校に配ってくださいました。『在日のいまー京都発ー』とありますが、これが94年に出されたブックレットです。同じく全朝教のブックレットでこれは95年、どちらも約20年前に出された本ということで間違いないと思うんですけども『在日のオモニはいま』、こ

の中に私の文章も恥ずかしながら入っているんですけれども。こういうものを出していただきました。この「いま」というのが、もう今ではなくて20数年前なんだなあって思いますけれども。こんなふうに学校現場でも先生方がこういうものを作って、読んで、勉強して、どんどんこれから教育を変えていこうということを一生懸命取り組んでくださったのが90年代だったんじゃないかなあって思います。

そういう中で、私の子どもたちも学校の先生が取り組みをしてくださった結果、少しずつ周りの子どもたちにも理解してもらって元気に学校生活を続けるということができました。けれども、それでも悩みは尽きなかったんです。メアリの会のグループで集まると、私たちは自分の子どもたちのために子ども会も作り、子ども同士を集めて朝鮮語の歌と一緒に覚えて歌ったり、朝鮮の民話を読み聞かせてあげたりという活動もしました。そういう時間を楽しんでも学校に行くときのお友達はなかなかそういうことを分かってくれないという悩みはあったんです。けれども、少しずつ理解をしてくれるお友達も増えていくことがあったかなあと 생각합니다。

京都市では、この教育方針を策定し、毎年「民族の文化にふれる集い」という行事を京都市全体の取り組みとして開いてくださっています。そういうところにもよく子どもを連れて行って朝鮮の民話の劇をどこその学校の人がやっているよ、どこその学校のプラスバンドの人がこんなアリランを吹いてはるよ、といつて見せたことを思い出します。けれども、当時からいつも私たちが学校の先生方にお願いをしてなかなか実現しなかったことがあります。それは、やっぱ子どもたち同士を会わせてあげたいということだったんですね。私の子どもの場合は、メアリの会のメンバー同士が集まって、子ども同士でも会活動はしていたんですけど、本当は、京都市全体には孤独な思いで、学校に行っても朝鮮人、韓国人である自分は独りぼっちだと、周りのお友達はそういう悩みはわかってくれないという思いをしながら学校に通っている子どもたちがたくさんいるんじゃないのかな。その子たちがのびのびとお正月にはトックを食べたよとか、うちのおばあちゃんは、こんなキムチを漬けるのが上手なんだよとか。なんの遠慮もなくそういう話をしあ

えるような場を作つてあげてほしいなということも思っていたんですけども、なかなか実現しないということがありました。

けれども、20年が経ちまして、京都市で土曜コリア教室という取り組みが始まり、2009年度からですから、もうすでに4年の実績をあげておられます。この4月からは5年目になるということをお聞きしています。私の子どもたちは、もうとっくに大きくなってしまつて、直接コリア教室に寄せていただくということはできなかつたんですけども、今の子どもたちにとつてどんなに素晴らしい場をつくつてくださったかなあと思い喜んでおります。これは年に十一回の教室だそうです。定員60名なんですけれども、2011年度は42校から75名の子どもたちが参加して、毎月朝鮮の文化に関わるようなことをいろいろ教えてもらつて、楽しく一年間を過ごしたということをお聞きします。こういうことをお聞きすると、自分の子どもたちには間に合いませんでしたけれども、教育委員会、学校の先生方のほうにもお願いをしていたことがちゃんと受けとめていただいて実現をいただいたのかなあとというふうに喜んでおります。

この20年の後半10年ぐらいは、韓流ブームというものがあつて、皆さんにも韓国というものをとても身近に感じていただけるようになりました。おかげさまで、昔は変な名前だつて言われた私の娘たちの名前も最近はとつてもウケがよくつて、かわいい名前やねとか、いい名前やねとか言われて、その名前で上の二人は就職をして日本の企業で働いています。三人目は大学生ですけども。そういうことを思つたらさういふんと社会も変わったなあ、私たちのことを当たり前の存在として受け入れてもらえるようになったのかなあと嬉しく思つております。

けれども、反面ですね、その韓流ブームとちようど同じ頃、2002年に当時の小泉首相が平壤へ行って金正日総書記と日朝共同宣言というものを出して、そのときに拉致事件も北朝鮮が公式に認めましたので、それ以降日本のジャーナリズムでは北朝鮮に対する猛烈なバッシングが起こるようになりました。それは責められて当然と言えは当

然のことなんですけれども、関係のない朝鮮学校の子どもたちまでがそのことのためにチマチヨゴリを切られるというような事件が多発するようになりました。また、インタネット上でも本当に心ない書き込みが増えるようになってきたかなあと思っています。

そうすると、かたや韓流ブーム、かたや北朝鮮バッシングということで、在日で過ごしている私たちはなんとも言えない不安な気持ちを実はやっぱり抱えております。最近では、公然と「朝鮮人は出ていけ！日本のこの国土から外国人は出て行け！」というデモをするようなグループがあつて、そういうことを、やっぱり私たちの子どもも敏感に感じとっています。「お母さん、ここYouTubeを開いたらこんな映像が観られるよ」と子どもがメールで教えてくれるんですけども、下の子は、「いや、やっぱりお母さんはそんな見んとき、お母さんが見たらショック受けるから」と心配してくれるんです。本当にそういうことが最近は起こるようになっていきます。

それに今は外交上もいろいろとギクシャクしていることもありますよね。そういうことを思ったら、本当に教育の場とか、また行政のほうでも国際化、そしてこの「チヨゴリときもの」もその一環だと思えますけれども、こういう努力を積み上げてきてくださっているんですけども、なんか一瞬のうちにくずれてしまいはしないか、今までの努力はなんだったのかしらという不安を感じたりもしている昨今です。

ですから、コミュニケーションの必要性はますます高まっています。私たちがどういうことを考えているのか、どういうことを思っているのか。私たちは平和を願っているんです。日本というこの土地に私は外国人として韓国籍という国籍を持ったままで生活をしていますけども、やっぱり私たちが願っているのは平和ですよ。日本も朝鮮も大切ですよ、私みたいな立場の人間にしてみたら。自分のルーツは朝鮮半島にあるんですから、先祖代々そうやっていろんな文化、伝統と一緒に命を引き継いできてもらって私がいるんですから、私にとっては朝鮮半島も大切ですけども、でも、生まれた時からずっと日本で暮らしていますし、もう日本語でしかものを考える言語を持っていませんので、

日本も私にとってとはとっても大切な所です。どっちも大切という人間にとっては、その両方が喧嘩するなんていうことは、想像するのもちよつと辛いというような絶対には起こつてほしくないということなんです。この平和を守ってほしい、いや、守っていききたい。そのために自分にできることはなんでもしたいということの日頃考えているわけなんです。「平和を大事にしましょう」って、皆さん、イイカッコで言ってるんじゃないんですよ。申し訳ないんですけど、これはとってもジコチュー（自己中心的）な思いで言わせてもらいます。自分が困るから平和を願います、と。これは、ジコチューですからちよつとえらそうに言うことじゃないんですけども、逆にいえば、これって嘘じゃないってことですよ、皆さん。嘘で言っています。自分が困るから言っているんですよ。自分が困るから日本と朝鮮半島とは仲良くしてほしいということを考えているんですけども。

なかなかそういう当たり前に思っていることも、コミュニケーションが私たちは不十分ですから、ああそんなふうには思つてはつたとは知らなかったということがまだまだあるわけですよ。これからの時代、ますますそういうコミュニケーションが大切なんじゃないかなと思います。まだまだ語られていない言葉がある。私たちはお互いに知っていないことがあるし、知り合わないといけないことがあるということじゃないかなあつていうことを、最近は思わされていきます。

2005年から教職に関わらせていただくようになりまして、学校現場の中でも在日の子どもたちに出会つたこともありました。今の時代の子どもたち、やっぱりいろんな悩みを抱えています。昔の私のように在日朝鮮人で、韓国人で日本人のお友達との関係に悩んでいるという人もいますけれども、最近の特徴としてダブルの子どもたち、とても増えています。お父さん、お母さんの一方が日本人で、一方が外国人、そういう子どもたちはそういう子どもたちでやっぱり自分は何者なんだろうということ、とっても悩んでいます。また、帰化をして日本国籍を取得したという人たちも増えています。帰化をして日本国籍を取得したけれども、そのことでカン先生に比べて私はなんか申し

訳ないみたい、うしろめたいみたいなことを講演の感想に書いてくれた子どもたちもいました。本当はそんなことを思う必要はないですよ。帰化をした方は、帰化をした方の立場だからこそできることももちろんあると思いますし、お互いに協力し合っていけばお互いが気持ちよく生きられるような、お互いが幸せに生きられるような社会をつくっていくために、お互いに手を取り合えばいいだけのことなんじゃないかと思うんですけども。やっぱり悩んでいる子どもたちがたくさんいます。

どうも韓流ブームがあつて、北朝鮮バッシングがあつて、今アンバランスな状況の中でテーブルになっちゃっていることも増えているのかなと思います。ネットの書き込みのページをひろげたら、こんなひどいことが書いてあるけど、ふだんは、それは蓋をしてあつてタブーにしてあつて、そういう問題には触れないようにしちやつています。けれども、そういう状況の中ではやっぱり不安ですよ。ですから、もつともつと、これからも言葉があるんじゃないかな。お互い知り合うことが、口に出して気持ちを確かめ合うことが大切なんじゃないかなと思います。

そういう意味では、「チョゴリときもの」の連続フォーラムも20周年ということで、ますます大切に存在意義があるんじゃないかと思っております。これから、もつともつとお互いを知り合うことによつて平和を守り続けるという方向性での明るい未来を考えることができればいいんじゃないかなと思っております。どうもありがとうございます。

**仲尾 宏**：ありがとうございます。20年を振り返つて個人として、あるいは日本社会の動きの中で揺れ動く気持ちを率直にお話していただきました。今も触れられましたが、一つ年表に間違いがございまして、終わりから三つ目のところ、先ほどの拉致問題のところですが、2005年にしておりますが、2002年の間違いでしたので訂正をお願いします。カンさんへのご感想やご質問がいろいろあると思いますが、後ほど受けたまわるとして、さっそく次に陳太一（チン・テイル）さんに「私の二つの名前と東九条マダンのこと」というタイトルで、ここではチン・

テイルさんという本名で紹介させていただいておりますが、二つの名前という問題、あるいは東九条マダンのこと、そのあたりのことを中心にお話をしていただければと思います。よろしくお願ひします。ちなみに、東九条マダンもこの年表に書きましたようにちようど92年に始まっておりますから、満20周年です。去年の秋のマダンには初めて京都市長が挨拶にみえました。そんなことも含めてチン・テイルさん、お願ひいたします。



陳 太一氏

陳 太一（チン・テイル）：チン・テイルです。よろしくお願ひします。まず、簡単に私の自己紹介をさせていただきます。両親とも在日韓国人で第二人いで、長男です。大阪出身で京都には二十歳で出てきました。今の市バス運転手の仕事は13年前からやっております。ここに国籍が日本と書いてあるんですけども、僕が帰化したのは、18歳の高校3年の時です。僕の大阪の出身地は被差別部落地域で、在日韓国・朝鮮人問題も取り扱っている地域だったんで被差別部落の問題と在日朝鮮人の問題の両方をやった地域なんです。そこで小学校、中学校、高校と過ごして、いっぱい知識を教わって中学校の3年の時にチン・テイルという名前で、わずか3ヶ月ですけど生きていました。僕のチン・テイルの人生はその3ヶ月と、東九条マダンの立ち上げ準備に2年かかっていますので合わせて23年前から東九条に関わることになって、チン・テイルという名前も使ひ始めたのはその頃からです。もうひとつの名前、帰化した時からフクモトタイイチという名前も使ひモトというの、幸福の福に本なんですけど、タイイチという下の名前はよく言われるんですけど、全然違う名前に変えています。それは、親が探られるのを恐れて名前を変えたということと、占いでみてもらったら字画が悪いので名前を変えようかという、その二つの観念から、天下泰平の泰に、市場の市という字で泰市という名前。福本泰市、

今はその名前でバスの運転手をしております。

この二つの福本泰市、チン・テイルという名前を僕は今堂々とこういうふうには皆さんの前で名乗れるのは、ごく最近の話です。両親ともども韓国人で、たとえば大体、本名はチン・テイルです。だったら本名を名乗って頑張りましようと言われるのが僕たちが在日の世界なんです。日本名を使っていたら、東九条マダンもそうなんですけど、こういう会に関わっていたら、絶対にチン・テイルなんですわね。福本泰市という名前はいっさいなし。

僕がなぜ東九条マダンに関わるかという話、これはちよつと話を戻らないと駄目なんですけども、僕が帰化した時に日本人で生きようというふうに決めていました。帰化したならこの日本に住むんだったら日本人で生きよう。でも、中学校の時に3ヶ月だけですけど、チン・テイルで生きた自分がいた。自分は一体何者なんやろなと、そこからずっと迷いが始まるんですけど、その迷いがあって、帰化したきつかけでその迷いが取れてしまったんです。だから、ずっと福本泰市で生きてきたんですけど。はたちで京都へ来た時に、不動産関係の仕事をしてたんですが、その時に差別の实情を目の当たりにしたんです。例えば、賃貸マンションで入居する時に韓国人が来ましたと。その人は名前が書いてる隣にカッコで韓国名を書いてあったんです。国籍は韓国。在日ということもざつと書いてあるんです。それを上司に見せたら、「ああ、韓国人や、やめとこ。」そのひと言でぱつと蹴ってしまったんです。僕はなんでやるなと。入居募集で来たって、なんで「韓国」で蹴りはるんかな。聞いてみたら、「部屋で焼き肉をする、キムチ臭くなると。だから、掃除が大変やし、そんなん入れんとこ。」と、あっさり言われた。僕もその時初めて自分の中にいたチン・テイルというのがぐわつときて、これは駄目だなと、こういう社会は駄目なこと、チン・テイルという名前でもちよつと生きてみたい。もしくはその差別することに対して、もつと訴えていきたいなというふうに思っただけです。

その時に僕の古巣の東大阪蛇草の解放センターに行って、京都でこういう活動したいんやけど、どっか紹介してくださいということで、紹介されたのが崇仁の隣保館に行ったら、ここではそういう話ではできないということで、解

放同盟の本部へ行ってくれと。本部に行つて、こういう活動をしたい、在日韓国人が差別を受けて、僕はそれは許せないんですという話をしたら、京都のその解放会館の人は、「いや、うちは、もうそういう問題を取り扱つていないんで知りません。」と言われたんです。「大阪は一緒にやつてゐるのに、なぜ京都は一緒にやつてないんですか。」「仲が悪いしな。」えっ！それで終わるの？みたいなところもあったんですけど。僕は会館の人たちと何人か交代で話をしているうちに、「ああ、ちよつと待つて。在日で知つてゐる人がおるかもしれんし。」と声をかけてもらつたんですよ。ご存じの方もたくさんいらっしゃると思うんですけど、大体帰化する時には日本らしい名前を付けなさいというのが日本の国の法律みたいなものがあつたんですけども、それを裁判で打ち破つて日本国籍を持つてパク・シルという名前を勝ち取つた第一人者と出会うことになつたんです。ハンマダンというグループが東九条にあつて、そのグループで活動することになり、そのグループといろんな在日の団体、韓国民団、朝鮮総連や小さいグループが集まつて、東九条マダンを一緒にしようということ、おおかた準備に2年かかつていますので、22年前に東九条マダンを立ち上げることになりました。

自分の話に戻るんですけども、はたちの時にパク・シルさんと出会うまでおおかた1年ぐらい路頭に迷つてあちこち行つていろいろやつてみたんですけど、なかなかタイミングがなくて、ようやくパク・シルさんに出会つて、チン・テイルという名前をそこで名乗ることになつたんです。とまどいがすごくありました。なぜかという、やつぱり福本泰市という名前は自分にとっては馴染みがある名前ですよ。すごく親近感があり、今までそれで生きてきたんだから、たかが3ヶ月とこれからチン・テイルと名乗る名前というのはちよつと他人の名前やなあというふうに思つていたんですけど。20年経つて今思えばあの時はそうだったのですが、今はやつぱりこの名前も僕の人生の一部なつてしまつた。

パク・シルさんからすれば日本国籍でチン・テイルという名前を取り戻せばええやんとよく言われるんですけど。

そうじゃないんです。それを取り戻したら、福本泰市という人生が消えてしまいそうな感じがする。だから、福本泰市とチン・テイルは僕の在日韓国・朝鮮人その人生においては大事な二つの名前なんです。ここで、僕もこうやって話ができるのは、最初は喋ってええんかなあというのがあったんですけど。それは、やっぱり在日の世界ではタブーだったんです。どっちかにしろといつも言われたんです。チン・テイルと福本泰市というのは、パク・シルさんみたいにああやって頑張っている人もおるんやから、その背中を見て自分の名前をちょっと取り戻したらどうやと、22年間ずっと言われ続けてきました。でも、僕は、どうしても捨てることができなかつたんですね、福本泰市を。

いつも中途半端、中途半端と言われているんですけど、中途半端をずっと続けてきたら、いつか本当になるんですよ。5年前に東九条マダンの実行委員長をパク・シルさんの後僕が引き受けることになったんですけど、「僕でないですか？」と聞いた。「僕みたいな中途半端な立場でチン・テイルと福本泰市、仕事では福本泰市と言っている人間が表に立って東九条マダンをするということは、こういう在日のお祭りにとっては駄目じゃないですか。だから、僕はどうそういうことは受けたくはないです。」5年前というのは韓流ブームが終わって、ようやく僕みたいな立場の人たちがちょっと主張できるような時代になってきたんですね。だから、僕は、そこで思い切って東九条マダン実行委員長をすると同時にこの二つの名前を前面に出していこうと。よくよく考えてみれば、僕みたいに迷っている人はたくさんいる。本当に活動している人っていうのはひとにぎりで、在日韓国・朝鮮人という立場を隠して日本名で生きている人が大半だと思う。そういう人たちの勇気づけじゃないですけど、僕みたいに堂々とこうやっていけますよ。日本の名前を持っています。朝鮮名も持っていますと。そういう時代になってきたから僕も堂々と言うていこうと。東九条マダン実行委員長をしているんやったら、そんな後ろめたい気持ちでやるよりかは前面に堂々と二つの名前を出して自分の思いを皆さんに伝えていきたいというふうにすごく思っていました。

名前について比率で出すのはおかしいかと思うんですけど、今チン・テイルが七割で、福本泰市が三割なんです。

20年前に差別事件が発覚した時東九条マダンに関わる福本泰市のほうが七割、チン・テイルのほうが三割ぐらいでしたが、年月が経つことによってそれが逆転してきたんですけども。悩んでいる人のために僕は堂々と前に出て、こういうふうに訴えていきたいなとすごく思っているんです。

もうひとつ、僕は交通局に勤めて13年目ですけども、職場でどういうふうに言っているかということもちょっとお話をさせていただきます。プライベートを一步踏み込んで皆さんにお話することとは自分でも辛い部分もあるんです。職場では、僕が東九条マダン実行委員長ということとは、もう大半の方が知っていますね。自分でもアピールをしていますし、ポスターとかチラシを配り、去年は読売テレビではばんばんと夕方6時から流れていましたし、それを職場の全員が観て、「おお、お前頑張っているなあ」というふうに言ってくれるようになりました。職場ではそういうふうにはチン・テイルというもうひとつの名前を持っているということも皆さんに理解してもらっていると思うんです。この交通局には実はあと二人ほど本名で勤めている在日韓国人の方がいます。仲尾先生が持つていらつしやっただ本にも載っているんですよ。ソウ・チョウキルさんは現業職として京都市職員に入った在日韓国人、その第一人者です。あと二人いるんですけど、僕は四番目ぐらいです。僕が入るきっかけは、そもそも電車の運転手が夢で目指していたんですけども、そう簡単にはなれないんですよ。アイフルを10年間勤めましたけど、その会社を辞めてから自分はやっぱり運転手の仕事をしたいということで、トラックに乗りましたが、最終行きつくのはバスやなあと。運転手の最高級であるバスの運転手になりたいということで頑張ったんです。その夢がようやく叶って、僕が入社する時にチョンギルさんが顔を知っていたので、走って来て、「お前、本名でええんやろ。」「いや、ちょっと待つてください。免許証の名前は福本泰市です。」「どっちで行くねん?」「僕、やっぱり仕事は福本泰市でいきたいです。」「お前なあ、俺が本名でこうやって頑張っているのに、どうすんねん!」とすごく責められたんですけどね。「でも、僕は自分のりのやり方をちよつとやらせていただけですか?」ということで、福本泰市という名前で今の職場に入ったんです。

チン・テイルという名前は、東九条マダンをやっていて、テレビ報道なり僕が行動で伝えるということで、徐々に皆さんが知るようになるんですけど。呼び名は当然福本ですよ。あまり違和感はないんですけど、チン・テイルと福本も、さつきお話したように七…三ですけど、仕事をしている段階でもう五分五分になってきてしまっているかなあというふうになんか思いました。

自分が東九条マダンをやっているというのは、職場の同僚の人たちにはどっちかと言えばちょっと迷惑をかけるほうなんです。仕事っていうのは、自分の勤務があつて、休みを取って、そういう活動に関わる。その時にいつも言われるのは、「お前はええよな。そうやってマダンとかで休みを取れるし。」僕が休み取ったら他の人は僕の代わりにバスを運転しなければいけないので休みを取れなくなります。バスの運転手になった頃、それをものすごく言われて、「それはそうですね、すみません」というふうに言うて、活動に関わっていたんですけど。かといって、仕事をおろそかにするわけにはいかないですよ。だから、僕はバスの運転手になって何をしなあかんか、お客様のために定刻運行でバスを走らせて、事故もせず、トラブルもなく、帰ってくるという、当たり前のことですけどもね。そういう当たり前のことを人一倍頑張ろうというふうになんか自分でも努力をしたんです。同じ運転手の中でも、最高級なものを目指そう。そしたら、誰も何も言わないだろう、というふうになんか自分に言い聞かせて。資格制度で金バッジ、銀バッジ、銅バッジとあるんですけど、バッジの色で紫が指導運転手でいちばん偉いのです。偉くはないのですけどね。銀バッジは緑色で、銅バッジは黄色です。これは評価制度です。どれだけ仕事を頑張って優秀にしているか。なんとか10年経って指導運転手まで上り詰めて、金バッジももらって、運転手の最高級になり、これで皆さんも何も言えへんやろと。やっぱり人の前に立つ仕事もどんどんとしていくということに対しては、もう誰も何も言わなくなってきました。今では東九条マダンを逆に応援してくれるほどになつたのですが、これは、自分で自分を褒めているのかな。すみませんね。そういうふうにして東九条マダンのために立場を盛り上げてきました。それから、職場現状も隣の

阪が民営化という話になって、僕たちも気を引き締めないと本当に追い込まれるぞというふうには、いつもお客さんにサービスしなさいと話しているんです。

余談ですけど、実は今日違うところで接客マナーの研修に行って来たんです。だから、僕は身だしなみをきっちりしてやっているんですけど。その時に言われたのが、やっぱり身だしなみと誠実さ、それと、見た目と、声のトーンとかも言われたんです。そういうこともきっちりしなさい。バスのアナウンスもあるけども、自分の声でもきっちりとお客様に接しなさいと研修を受けて、それはもつともやなというふうには思っています。皆さんもバスの運転手で態度の悪い人がいたら言うてくさいよ、本当に。「あの運転手はほんまに態度悪いし…」運転手は、最近態度がだいぶ良くなったと思うんですよ。まだ愛想の悪い人とか、運転マナーの悪い人がいますけども、僕たちは指導運転手ですからね、どんどん指導していきますんで、交通局にどんどん「あの人は悪かった」と言うてくさいよ、本当に。市民の足として頑張るのが僕らの仕事です。そうやって仕事もきっちりしてすることなんです。ちなみに今日は休みです。

そういうことで、東九条マダンの実行委員長をやっているんですけど、本当に負担は大きいんです。マダンに関わっている人がスタッフとして大体三百人いるんですけど。事実上動いているメンバーは20人ぐらいなんです。事務局メンバーなんですけど。その人たちと一緒に年間通して東九条マダンを計画して、当日運営をします。スタッフも全部僕たちがします。トラックの運転から、搬入、撤収から全部やります。東九条マダンというのは1日だけのお祭りなんです。それ以外にいろんなところで、いろんな人たちと接点を持ていかないき、今の時期でしたら2ヶ月に一回。7月からは毎月実行委員会があるんですけど、その時にいろんなテーマを掲げて、僕たちで勉強会なり講習会をやっています。これは一般にも呼びかけていますので、東九条マダンのホームページには何月何日にどういうことをするということが書いてありますのでご覧ください。

東九条マダンはようやく立派なお祭りになってきたかなというふうには、20年経って思うんですけど、去年20回が終わって大体六千人の方が入れ替わりですがいらっしやいました。僕らのコンセプト、なんで東九条マダンをするかというのをざっとお話をすると、在日韓国・朝鮮人、それ以外の外国の方、障害者の方、小さな子どもからお年寄りまで、一緒にひとつのマダン（広場）で一日楽しく過ごしましょうと。全ての出発地点はそこにあると思うんです。そこで出会いがあって交流があって、交流があるということは、在日の人と日本人が知り合ってお互いに挨拶をするわけで、そこからいろんなことが生まれていくというふうには。差別をなくそうとかいう深いこだわりではなしに1日をとりあえず楽しもうというお祭りです。

僕も含め中心にいるメンバーの半分以上も20年間やっていますので今後の悩みというのは後継者問題ですよ。30回、40回を目指してやっていきたいなと思っています。そのためにはどうしたらいいか。もっと若い子をいっぱい事務局レベルまで引く張ってきて、一緒に運営に関わっていくようにやっていますが、最近景気が悪いせいかな若い人たちは仕事がなくアルバイト詰め、ましてや仕事をしている人たちは、うちのメンバーでも夜の10時、11時という子がざらにいるんですよ。僕の場合は勤務時間が終われば時間があるんです。その時間は僕が動ける時間として東九条マダンのことで動いているんですけど。やはり、今の若い人、二十代、三十代の人たちの話を聞いていると時間がない、休みも少ないというのが大半です。三十代の人でも正規社員でないというメンバーも何人かいます。そうやってくると、今後の後継者問題は東九条マダンだけではなく、社会問題にも関わってきますし、僕たちが東九条マダンを続けていくには果たして本当にどうしたらええんやろうなというふうには今すごく悩んでいます。です、とりあえずは僕らがやるしかないなと。30回ぐらいまでは頑張れるかなと。もうちょっといけるかな？。パク・シルさんがもう60後半ですから、あの人5年前まで実行委員長をしていたので、そこまでいけるかなというふうには考えたらず、まだ先の長い話でできるかなと思っっているんですけど。でも、若い人にも引き継いでもらって東九条マダンというお

祭りをどんどん続けていきたいなと思っています。

ちなみに東九条マダンの実行委員会の中味なんですが、三分の二の人が日本人なんです。三分の一が在日韓国・朝鮮人の方です。在日韓国・朝鮮人の方というのは、僕みたいに帰化した人もひっくるめています。当日来られる方もおそらく大半は日本人の方じゃないかなと思っています。入場者数の数字は読むんですけども、来てはる人の中味は全然分からなくて、できるだけアンケートを出して答えてもらっています。アンケートの統計も東九条マダンの報告書の後ろに載せていますのでご覧いただいたらよく分かるかと思います。

僕の今日の題名というのは、「私の二つの名前と東九条マダン」。その二つの名前というのは永遠に結論が出ないのではやけた話になってしまいました。またどこかでお話をする機会とか、東九条マダンについて聴く機会があればよろしくお願いします。以上です。

**仲尾 宏**：ありがとうございます。チン・テイルさんは日本の国籍を取得されて、その上で名前をどうするか。今お話を伺っていると、本名だけではない。いわば第三の道を模索されてきたような感じがいたします。東九条マダンのことについては、今二階で写真展をやっていますので、ぜひお帰りにご覧になっていただけたらと思います。

それから、先ほどチン・テイルさんがおっしゃった中で、日本に帰化した時に、日本名を名乗らなきゃならないということが過去にあったとおっしゃいましたね。そのことについてですけども、この資料の3ページ目をご覧ください。京都市における外国籍の登録者です。特別永住者が二万一千百十六人、パーセンテージにして全外国籍者のうちの52%を占めています。この方たちがいわゆる在日です。平成24年12月末、二万一千人のうち日本名の人、あるいは使い分けておられる人が、正確なことは申し上げられませんが、おそらく七割ぐらいじゃないかと私は推定してい

るんですけどね。いちばん多い時では四万人弱だったと思います。それが減少しているのは、ひとつは一世の方、二世の高齢者の方がお亡くなりになっていること。それから、もうひとつは、日本国籍、つまり帰化された時に、条件は特別永住者のようにもうほとんどが二世、三世、四世だったら、基礎的な資格はもちろんあるわけです。それ以外にいろんな条件があるんですけども、そこには日本人らしい名前をつけろという条件は国籍法の帰化条件の中にはないんです。ところが、かつては日本国籍を取る、つまり帰化するんだったら、日本人らしい名前にしろということ。を法務省が係官を通じて執拗に言ってきたそうですね。それで、半年、1年、1年以上かかってはまだ許可をもらえていないという例がたくさんありました。最近では日本名をどうしても名乗れということは露骨には言っていないようですが、しかし、陰に陽に精神的な圧力があると今でもお聞きしております。日本国籍を取る人については係官がそのようなことをうまく誘導する、あるいはそのようにしむけていくことがあるようです。その結果として日本名を名乗る人が多い。それから、パク・シルさんのように親とともに日本国籍を取った時に日本名だったんだけれど、自分としては納得できないということで朝鮮名にかえたいということをやっても、それは受け付けられなかった。それで裁判を起こして、裁判の結果本人に言い分があると、認めたらいいじゃないかという結果になって日本国籍でありながら名前はパク・シルという民族名に戻されたという非常にめずらしい例なんです。そういうことで、いずれにしても名前というのは在日の方にとっては非常に悩ましい問題であることは間違いないと思います。

それでは、今から休憩に入りますが、お二人について、あるいは「チヨゴリときもの」についての皆さんのいろんなご意見、ご質問、感想をいただいで後半のセッションに入ります。

司会：パネリストのお二人方、どうもありがとうございます。第一部を終了いたします。今コピーライターからお話がありましたように、お話に基づきましてご意見、ご質問がございましたら用紙にご記入の上入口の箱の中に

入れてください。それをもとにしまして、第二部につなげてまいります。開始予定時間は20分とさせていただきます。二階で写真の展示をしておりますので、お立ち寄りください。

司会：お待たせいたしました。第二部を開催いたします。本日は12枚のご意見とご質問をいただきました。その中から先生よりお二人に質問をお預けしたいと思います。



仲尾 宏：今回もたくさんのご質問とご意見をいただきました。時間の関係上端折って進めなければならないこともあるかと思いますが、ご了承ください。まず、一番目の方、「先日在留資格更新手続を忘れた定住者について仕事をする機会がありました。彼はまだ元気だったので、大阪入管に何度も足を運ぶなど苦労をしましたが、なんとか定住資格を得ることができました。しかし、認知症で単身介護の定住者が更新手続きを忘れたらどうなるのだろうか、とても気になりました。チンさんに質問ですが、東九条マダンでそのような例がもしあればどのような対策をされたか教えていただけると幸いです。」いかがでしたでしょうか、チンさん。

陳 太一（チン・テイル）：東九条なんで本当にたくさんの方、いろんな方が関わっておられました、東九条マダンを始めた頃は一世の方がまだ元気でした。トラブルというのはいくつもあるんですが、東九条マダンのメンバーがフォロワーに入るとか、あとは地域のいろんな施設関係の方に手助けをもらうということ。東



九条マダンというのは基本的にお祭りですので、なかなかそこまで足を踏み入れることができないというのが現状で、僕が知っているかぎりでは、行けるものなら手助けに行っております。

**仲尾 宏**：確かにこのような方が大変困った状況になられるというのは分かります。例えば、お薬を飲んだか、飲んでないかという服薬管理が自分でできなくなる方がおられますね。そういう方が在留資格の更新手続きというようなことをきちんと認識されるかどうかは非常に条件が悪いですね。そういう点で、こういった高齢者の認知症の方、介護の必要な方のことについては実は隠れた問題がたくさんあるんじゃないかと思えます。この場合は在留資格の更新の問題ですが、私への質問があります。「そもそも定住者の定義は何でしょうか。特別でない永住者定義も教えてください」という質問です。先ほどの資料の3ページをご覧ください。在日の方は、「特別永住者」です。特別永住者の方も一回登録すればそれですむんじゃないかって、更新期間があつて、手続きをする必要があります。「永住者」というのは、「特別永住者」、91年の入管特例法以外の該当者で、これは韓国から新しく来た人も含めて、満5年以上日本で安定した生活をしている人については永住者の在留資格を申請する条件ができます。「定住者」というのは、5年じゃなくって、3年なんです。ですから、満3年経てば定住者の資格申請をするということになり

ます。ただし、「永住者」、「定住者」ともに更新の期間が決まっておりますから、その都度更新を繰り返していくということになります。

その次、「カンさんへ」という質問です。「日本の社会が理解できるようになったけれど、まだまだコミュニケーションが不十分、タブーとなっていることも増えていると言われました。韓国の新大統領が日本に対して歴史認識が問題と指摘され、中国や東南アジアの指導者も同様です。私の周囲で一定理解ある人でも、全く歴史に対して無知な主張が多いのです。今日の日本名の問題で、在日の方が悩まれているのも日本が創氏改名を強要した歴史があるからです。日本のマスメディアでも、全くこの問題をまともに取り上げるようなことはいたしません。日本人として恥ずかしいかぎりです。どのようにすれば日本人の歴史認識が改められ、正しい認識を持つことができるのでしょうか。」という質問です。尚、この「創氏改名」は、1941年に朝鮮半島全土に対して実施されました。その結果日本に來ている人だけじゃなくって、朝鮮半島に住んでいる人であっても、全員日本名を強制されるというような歴史があったことの反映であります。まず、カンさん、ひと言お願いいたします。

**康 玲子**（カン・ヨンジャ）：とても難しい問題ではあるんですけども、私の立場から言えば、日本人の歴史認識が改められるように、改めさせてやろうなんていう、そんなことは自分にできるはずもないと思っております。また、「改めさせてやろう！」みたいな感じで何か働きかけをしたら、逆に心の扉が閉ざされてしまって、「もうそんなことを無理強いされるなんて嫌です」と言われるのが目に見えているような気がしてしまいます。そんなふうに改めない駄目ですよとかいうのではなくって、本当に歴史を知ってほしい。そのためには、先ほどからもコミュニケーション、コミュニケーションと言っていますけれども、どうぞ私たちの存在をもっともっと身近に感じていただきたい。もうすでに京都市に四万人以上の私たちがいるわけで、ご近所にも在日の方が住んでおられて、友達付き合ひして

いますとおっしゃる方も多いかと思えます。ぜひ、そういうコミュニケーションをもっと盛んにしていただきたい。テレビをつけると韓国ドラマを観ることができそうですけれども、それだけじゃなくて、生身の人間と人間との触れ合いというものをもっともつとさせていただきたい。11月3日に東九条マダンに遊びに行っていたら、いろんな知り合いができる、友達が増えるきっかけになるんじゃないかと思えますけれども。まず、人と人との触れ合いから出発するものじゃないのかなあと思います。そういつた時に、何でカンさんは、そういう名前なんだろ。そういうお名前なのに、何であなたは日本語を喋ってここに住んでいるの、といったところから関心を持っていただいて少しずつ学んでいただけたら嬉しいですし、どうしてカンさんは、どうしてチンさんは名前を二つ使っていらつしやるのかと心から生身の人間に興味を持っていただけたら、堅苦しい歴史の勉強ではなくて、生きた歴史認識としてその扉を開いていただくことになるんじゃないかなと思います。歴史を知っていただくというのはそんなに難しいことではなくって、今までのいきさつというものをちょっと知っていただきたいという、人間としての当然の願いなんです。

仲尾 宏：チンさん、このことについて何かご感想があればひと言お願いいたします。

陳 太一（チン・テイル）：ひと言だけなんですけど、僕の中では「在日韓国・朝鮮人という気持ち을忘れない」ということなんです。日本名も大事で、それは自分の人生の生き方の一部なんです。チン・テイルと福本泰市の二つの名前を使っているんですけど、自分の本当の祖国はどこにあるねんといえは、「朝鮮半島にある」という気持ちを忘れない。また、これを人に伝えていくということが大事かなと思います。

仲尾 宏：次も名前に関することですが、カンさんへのご質問です。「カンさんの言ったタブーとはどのようなこ

とですか。昔の差別意識を背景としたタブー、例えば通名の在日は、に対してあいつは朝鮮やでというふうには陰に隠れて言っていることなど。そういうったタブーとはどのように違っているのでしょうか。あるいは共通している点もあるのでしょうか。」ということでした。

康玲子（カン・ヨンジャ）：…タブーという言葉を使ってしまったのは、もしかしたらふさわしくなかったのかも知れないと今反省しているんですけども。要するに、一方では排外主義的なことを言う人たちがデモをするということがあるわけですよね。「朝鮮人は日本から出て行け！」と言う人たちがいるんですけども、たぶん、そういう人たちは一部の人たちだろうというふうには思っています。だからといって、普段はそういう話題が取り上げられていないということに不安を感じているという意味なんです。こういうことを言う人たちがいるけど、あれって良くないよねっていうふうに話題に取り上げていただくとか、逆に私にもちよつとむしろくしゃした気持ちがあるから、ああいうことをする人の気持ちもちよつとは分かるねんとか、普段の会話の中で出てきたほうが私は安心できるのに、普段の会話では触れられない。それは、もちろん康玲子（カン・ヨンジャ）さんの前でそんな話はやめておこうということなのかもしれないですが、私の耳には全く入ってこないんです。ただ、ネット上だけでそういうひどい書き込みがあるとか、実際にそういう人たちが集まってデモをするとか、どこかに襲撃をかけるというニュースが耳に入るという状況の中で不安になることがあるっていうことです。

何年か前、職場で一緒にしたことのある小学校の教師の方が学校を変わられて、ひさしぶりにお会いした時に、「新しい学校はどう？新しい職場はどう？元気にしている？」と言ったら、「いやあ、もう私は朝鮮の国に迷いこんだかと思いました。びっくりしたんです」とか言わはるんです。えっ！学校を変わらしたけど、在日朝鮮人の子どもがたくさん来ているそういう地域の学校でもなかったはずなのに、この先生は何をおっしゃっているんだろ、と首を

かしました。よく聞いてみると、要するにその学校の校長先生が「独裁」だということをおっしゃりたかったらしいんですけども。「独裁」ということを言う代わりに「朝鮮の国かと思いましたあ。」と言わったんですよ。私は一瞬意味がわからなくて、意味がわかった瞬間、もうショックで、「朝鮮」という言葉は私にとっては大事な言葉なので。そういう意味で今の若い人たちは使うのかと思つてすごくショックだったんですけど。その瞬間にその方は相手が康玲子（カン・ヨンジャ）だということに気がつきはったんですよ。「はあーっ」と言わはって、「あっ！ごめんなさい、ごめんなさい」と言わはったんですよ。だから、私たちは不安なんです。私が知らないだけで、ネット上のあのひどい書き込みが一部の人たちだけじゃなくて、たくさんの人たちがそんなことを言つてはるのかなあとかという不安がありますので、そういう話題をタブーにするんじゃないかって、苦々しく思っている私たちもいるんですよということをとつとつうに話していただけたらありがたいかなと思います。

**仲尾 宏**：よくわかりました。次の方、「大変勉強になりました。ありがとうございました。」というご感想です。五番目の方、「子どもを学校に入れる際、日本の公立学校へ入れる方と朝鮮学校へ入れる方がおられるようだが、何が違うのか。」ということ。日本国籍を持った子どもの場合は、満6歳になりますと就学させる義務がありますから、教育委員会から学校を通じて就学通知が行きます。ところが、外国籍の方には就学義務が必ずしもあるとは認められませんから、それは行きません。代わりに「就学案内」という通知が行くようです。それで日本の公立学校へ入れようか、という親御さんの判断で入れるわけですね。そうじゃなくて、京都にも韓国系の京都国際学校がありますし、朝鮮学校もあります。そういうところでは別に名簿があるわけではありませんから、人づて、口コミで生徒募集をして子どもさんを集めておられます。状況はそういうことですが、カンさんはこのことについてご自身のご経験、もし何かありましたら簡単におっしゃってください。

康 玲子（カン・ヨンジャ）：民族学校に入れることで自分の子どもに民族文化を伝えることができ、特に、幼い頃から朝鮮語を学ばせることができるということでは、とつても魅力だと思っただけでも、私の場合は住まいからかなり遠くまで行かないとそういう学校がないということもありましたし、私自身が日本の公立学校にずっと通って、日本の公教育を受けてきた中で周りのお友達と自分とが違うということでも悩んだということもありましたが、一方ではこの日本に住んでいく中で、日本の公教育からいただいたものもたくさんあったなあと思っておりますので、私は自分の子どもは日本の公立学校に入れました。それは、個人個人の選択ということになるかなあと思います。朝鮮学校も日本で住む子どもたちを育てるわけですから、一方では民族教育、朝鮮語教育をしつかり学ばせるということも大事にされていますが、日本の学校と同じように国数英社理というような形での勉強もされていることを聞いております。けれども、未だに一条校として認められない、また、高校の授業の無償化に関しても、その枠からはずされるというようなことが今問題になっていますけれども、私たちが在日にとつては、たまたま日本の学校を選ぶか、民族学校を選ぶかということなんです。経済面でそんなに差別をされてしまうというのが辛いなあということも思っております。

仲尾 宏：ありがとうございます。それでは、次に進みます。「朝鮮人、韓国人と分けて呼ばなければならぬのか。 코리아と言えとアドバイスされたことがあるが。」もうひとつは「情の話ではなく実体的に困っていること」と実務的に話してほしい。」後の方はご要望ですね。

最初のほうですが、「朝鮮人、韓国人、 코리아」という言い方ですが、例えば、古代史を見ると、「新羅、百濟、高句麗」を「三韓」というふうに呼んでおられて、これは日本書紀にも書いていますね。それから、「朝鮮」という言い方もあるんです。「古朝鮮」という王朝が存在したということもわかっております。ですから、ふた通りの呼び名がずつ

とあったわけですね。もうひとつ例を挙げてみますと、江戸時代に朝鮮通信使が日本にやってきました。それは朝鮮王国からの外交使節ですね。それを「朝鮮」と呼んでいた。ところが、日本の記録では、「朝鮮人がやってきた」と書いている記録もあれば、「韓人がやってきた」という記録もあります。だから、江戸時代まで日本人のほうも同じなんだけれども、適当に使い分けて、両方で呼んでいいんじゃないかという認識があったと思います。

問題は、近代になってからです。大韓帝国を日本が1910年の併合でなくしてしまいました。日本の総督府はいっさい「韓」という字を使わせない。そして、「朝鮮」という名前にしたわけですね。「朝鮮総督府」「朝鮮人」「朝鮮神社」ということになりました。これが1945年の解放以降どうなったか。不幸なことに米ソ対立の分断の中で48年に「大韓民国」「朝鮮民主主義人民共和国」というふたつの国ができました。そして、厳しい対立の中でお互いに相手を全否定するというようなことになって戦争が起ったんですね。その頃から韓国は朝鮮という呼び名はいいじゃない。朝鮮は韓国と呼はないで「南朝鮮」と言う。一方、韓国では「北韓(ブツカン)」だという言い方になってしまっただけですね。しかし、全面的にそうでもない。例えば、今韓国では朝鮮日報という大きな新聞社があります。だから、全否定しようにもしようがないですね。ところが日本の場合は、すぐ南だ、北だというイデオロギー的なものが非常に伝わっております。ですから、在日の方の中でも、私は朝鮮人という名前だけで通したいという方もいれば、韓国人で通したいという人もいます。あるいは両方を使い分けている人もいれば、どちらでもいいと思っている人もいます。そんな分断を人の名前、国の名前に持ち込むのは嫌だから、あるいはやめたほうがいいから「コリア」でいこうというようなことが近年増えてきて、私は「私は在日コリアンです」と、あるいは団体の名前でも「在日コリアン○○会」と名乗る団体も増えております。ですから、これは今申しましたような歴史的背景、とりわけ近現代の厳しい政治的、民族的対立が呼び出したことが在日の方にも影響しているというように考えるしか仕方がないんじゃないかと思っております。お二人、またご意見があればおっしゃってください。とりあえず、先に進みます。



「本日の話とは直接関係がありませんが、東九条マダンと国際交流会館のオープンデーが同じ日になってきました。性格や地域の違いもあり、参加者もそれぞれ違うかもしれませんが、個人的には両方のお祭りが重なるのはどうかと思えます。」という指摘です。私もそう思いますし、掛け持ちして両方に顔を出した年もございました。次の方、「3時間しか眠らず疲労しておりますので中座いたします。失礼します。」ですから、今ここにはいらっしやらないです。「ご心配された日韓関係は、私の知る限りではまったく問題ないと思います。庶民同士が付き合う時は平気です。しかし、ごく一部に跳ね上がり分子が歴史をつくってしまうことは、歴史的事実です。私たちは彼らの行為がごく一部なのに政治的報道によって大きく見えすぎることを心得た上で新しい未来を模索したいと思っております。」こういうご意見をいただいております。ここに書いてある政治的報道、あるいは跳ね上がり分子というのは皆さんも大体ご想像がつくと思いますので特に説明はいたしません。

次は、お二人個々への質問です。「カン・ヨンジャさんへ。2005年から教育現場に関わっておられるとのことですが、現在のお仕事に就こうと思っただけは何かはありますか。また、高校に通う、通わない若者たちが抱える悩みにどのように向き合っておられますか。」通わないというのは、中卒で終わってしまう、あるいは不登校で退学してしまうという方のことでしょうか。それでは、お願いいたします。

康玲子（カン・ヨンジャ）：現在の仕事に就こうと思っただけのことですが、私は大学を出てから主婦業をしておりました。先ほどお話した中で触れましたが子育てをする中で教育のことについていろいろと考える機会を与えていただきました。それで、子どものことはもちろん大切でしたけれども、自分自身のことでも振り返った時に、私って本当は学校の教師になりたかったのかなあとという気持ちがあるんだん強くなっていっただけですね。大学を卒業した頃は、大阪では全国的にもめずらしくそんなことはなかったのですが、少なくとも京都や私の出身である兵庫県やほとんど全国で外国人は公立の学校の教師にはなれないというのが現状でしたから、私は、はなから自分が教師になれるというふうには思っただけがなかったんです。なりたければいいんじゃないというんじゃないかって、なりたいたくも思わなかったんですね。私は学校が好きなんです。子どものころはよく学校ごっこをして妹たちを座らせて自分が必ず教師役をやっていたんですけれども、親に「お前は外国人やから学校の先生にはならへんからな。」とよくくぎを刺されていたんですね。ですから、なりたいたくもないなんて悔しいわと思っただけでもありません。そういうことは最初から願ってはいけないうことだと思いがら子ども時代を過ごしました。でも、不思議なことに大学時代に教職免許だけを取ってあったんですね。でも卒業する頃はひがんだ気持ちになってしまっていて、教師になろうとは思いません。子育てをする中で、私って本当は学校で働きたかったんだなと思うようになりました。ちょうど今から20年ぐらい前の93年頃だったと思いますけれども、京都市でも外国人の教師が誕生したというニュースがありました。初めてこの人が小学校の教師にならったよと聞いて、「ああ、世の中も変わったんだなあ。これからの時代は私の子どもたちは昔の私みたいにあきらめるんじゃないかって、教師にだってなりたいたくも、何にだってなりたいたくも、なりたいたくものになれる、そういう未来になってほしいな」と思いました。でも、その時には年齢制限というものがありませんでしたので、ああ私には間に合わなかったなあって思っていたんです。非常勤でしたら年齢制限なんかありませんよということの後から教えてもらいまして、それで非常勤という形で働くようになったというのが

2005年からです。現在、高校で非常勤講師として国語を教えております。

高校に通う、通わない若者たちが抱える悩みですが、私の学校にも不登校気味で学校に長らく来ることができなくて、また来てもフリールームで勉強だけをして帰るとか、一学期が終わったら退学してしまっただけの子どもたちもいるのはたしかなんですけれど、できるだけ関わりはしたいなと。国語科というのは心の中のこと書いてもらえぬ教科なのでなんとか生徒たちと心を通わせたいなというのを願っております。私自身は担任を持つような立場ではなく教科指導だけですのでごく限界も感じながら、一緒になって悩んでいるような現状です。

**仲尾 宏**：ありがとうございます。今高校の現状をおっしゃったんですが、実は、お隣の滋賀県はブラジル人がたくさん住んでいて、子どもも多いです。彼、彼女らの高校進学率は二割に満たないんですよ。ほとんど中学卒。これはやっぱり入学試験に合格できない。つまり、義務教育として中3まで行きますが、それに伴う学力がついてないんです。ですから、学科試験でどうしても通らないのでそういうことになっています。これは、かつて1940年代後半〜50年初めの在日の子どものたちの状況と非常によく似ていると思うんですね。親が子どもに十分な教育をしてやれないという環境がありますから、そういうことが余計に重なっています。まして、非漢字圏から来た子どもにとつては、日本の高校のレベルの学力をつけるにも基礎の能力が欠けているわけですから非常に深刻な問題になる。そうすると、子どもたちは将来の日本社会でどうやって暮らしていくんだ。いまさらブラジルに帰っても、もうポルトガル語を忘れていきますから、それもできないということになっております。これは滋賀県だけじゃなくって、いわゆるニューカマーのたくさん住んでいる地域では同じような問題が生じているようです。

もうひとつ、この方は、チン・ティルさんへの質問があります。「20年以上東九条マダンに中心的に関わってこられたそうですが、特に大きな壁、困難だったこと、困難な問題はありましたか。どのようにそれを乗り越えてこられ

ましたか。」というご質問です。先ほど言われていましたように、チン・テイルさんは、三代目の実行委員長さんです。ですから、過去のこともいろいろ聞いておられると思いますので、それも含めてありましたらお願いいたします。

陳 太一（チン・テイル）：たくさんあります。乗り越えなくてはあかんことが本当に多かったですけど。大きなことといえば、第一回の時ですね。これを東九条という地域で始めるということで、いろんな地域の自治連合会に挨拶に行くんですけど、「なんで、そんな朝鮮の祭りをこの地域ですんねん。」先ほど先生がおっしゃった統計を見ますと、多い時の特別永住者の人は四万人で、在日韓国・朝鮮人が非常にたくさん住む地域というのは東九条だったんです。当時三万人から四万人近くいてはったんかな。そういう数字を見たことがあるんですけど。その地域で僕たちがやるのは当たり前と思っているんですけども、地域自治連合会とか地域に住む日本人の人たちは、全然受け入れてくれなかつたんです。ですんで、僕たちが東九条マダンの第一回をやる場所を陶化中学校と決めたんですけども、ちよつといじわるをされて野球の試合を放り込まれたいりというところもありました。でも、初めというのは、難しいので強引にやっついていかないといけないところもあつたんで、なんとかその野球の時間を阻止しました。当時の陶化中学校の校長先生が協力的で東九条マダンにどうぞ使ってくださいというあの先生のそのひと言があれば東九条マダンなんていうのは、開催されなかつたのだなあというふうに思っています。

近年で言えば、僕が実行委員長をしてから学校統合があつたんですね。東九条四校が一校になって凌風学園になったんです。当然ながら統合になった学校を使わせてもらうんですけども、「去年統合されて向こう二年間ぐらいはまだ工事をするんで、うちでは東九条マダンに使えないですよ」というふうにあらかじめ言われていたんです。どっか空いてないかなあということで廃校になった陶化小学校と山王小学校があるんですけど、そちらを借りようかという段階になった時に、教育委員会のほうは、「学校は貸してもいいですけど、ひとつ約束事があるんです。地域自治連

合会の会長さんの承諾をとってください。」最初に喧嘩して強引に始めたんで、こらあ、かなり難しいなあということで、去年の話なんです。元陶化小学校で20回を開催したんですけども、正直ひよっとしたら開催は無理かなあ。殿田球場とかいろんな所を考えたんですけども、かなり難しいのでやっぱり頭を下げに行こうということ。僕は実行委員長になった時にもう何を言われてもいいから地域自治連合会の会長さんに挨拶に行こうということ。何回も足を運んでいます。二、三回は追い返されるんですけど、そのうち話を聞いてくれるというか、向こうが一方的にばあーつと言うてくるんです。お前ら朝鮮人はどうたらこうたら…と全部聞いて、「お借りできますか？」という話で。去年はなんとか貸していただけました。今年はどうひとつの山王小学校で、山王の自治連合会の会長に挨拶に行かな駄目なんですけど、去年の会長さんより手ごわいので、今年もまだ困難の山が残っているんですけど、足を何回も運んでお願いすることになっている次第です。

**仲尾 宏**：ありがとうございます。なかなか外の人間にははかり知れない大変な気苦労をなさっていると思います。次は、カン・ヨンジャさんへの質問。「私は韓国の学生（男性）です。1992年の1年間、小学校4年在学した経験あり。」日本の小学校にという意味ですね。「個人的には良い思い出を持って韓国に戻りました。第四錦林小学校のように周りの環境、外国人家庭の率が高い、つまり他国の友達との出会いの機会を増やすことが重要だと思えます。最後に現在の学校現場での在日学生などの現状を聞かせてください。」ですから、これは、カンさんの場合だと高校生ですね。在日の学生が今おられるか、あるいは他の学校の例でもけっこうです。お願いします。

**康 玲子**（カン・ヨンジャ）：全体を見回して正確なお話ができるわけではありません。私もたまたま自分の勤務している学校ですとか、それから私はいくつつかの府立高校で人権学習の講師として招かれてお話をさせていただく機

会があります。そんな時に高校生の感想文を読ませていただくことがあるんですけども。その中で見聞きする範囲でお話します。本名と言いますか、民族名ですね、私のように自分が朝鮮人であるということがひと目見てわかるようなお名前前で学校生活を送っている生徒さん、以前と比べたら本当に増えてきましたけれども、まだまだそういう人たちのほうが少ないと思います。やっぱり日本名を使って自分の国籍は周りの友達にはオープンにはできないという人たちがいるという状況が今もまだあるんじゃないかなと思います。

先ほど滋賀県のブラジル人の子どもたちのお話が出ましたけれども、在日韓国・朝鮮人はとにかく在日の歴史が長いからです、そういう意味では日本語に不自由するわけではありませんし、日本の学校生活に馴染んでいるという部分ももちろん大きいと思います。けれども、問題がないわけではなくって、いろんな悩みを持ちながら将来のことにもいろいろと不安を抱えながら、オープンにできないっていうことは学校ではそれが相談できないということですよ。そういう子どもたちがまだまだいるんじゃないかなあと思っています。私がこういう名前で教師をしていますと、後で廊下をこっそり追いかけてきて、「カン先生は外国人やのに公立の学校の先生になれるんですか。（今は私学で働いているんですけど、公立でも勤務経験がありますので）私たちは、なれへんのと違うんですか？」その子も在日の子だったんですね。「いや、今の時代はなれるんだよ。外国籍で学校の先生になっている人はたくさんいるよ」って言うたら、「えっ、そうだったんですか！」—その子の中ではずいぶん昔の情報しか持っていないんですね。だから、今の時代はもう変化しているのに、帰化してもバク・シルさんみたいに民族名を名乗ることもできる、そんな選択肢があるのに、それも知らないという人たちがたくさんいます。学校の先生にもなれるように、そういう時代が変わっているのに知らないという子どもたちがたくさんいます。外国人だからということではじめられたという人たちもいます。もちろん、そういう人たちだけではありません。外国籍だからっていじめられたことはないっていう人もたくさんいると思います。本当にいろいろですけれども、それぞれになってしまっって、皆がつながるといことがまだま

だ難しい状況があるかなというふうに思っています。

**仲尾 宏**：ひと言付け加えますと、外国籍の方が教職に就くことについては、1991年、待遇は常勤講師である。常勤講師であるというのは管理職に就くことができない。教頭や校長には将来就くことができない。けれども給与その他の待遇は日本人の先生と一緒にであるという条件付きで公開されました。したがって今カンさんが言われたように、外国籍の方で日本の公立学校で教員をしている人は全国でそこそこおられます。そういう歴史がありました。

次、ちょっと順番を変えます。十一番の方です。「在日コリアンの方の中でも帰化を選ぶ方、そうでない方というるな立ち位置の方がおられ、さらに帰化された方の中で、帰化後のお名前についてさまざまな葛藤の末に選択をされたりと本当に多様な在日社会の現実についての生の声を初めて聞くことができてとても興味深かったです。」こういうご感想です。次の方は、こういうご感想を出しておられます。「私の妻の父が炭鉱の仕事をしていました。拉致問題のニュースを観ては、『朝鮮人を無理やり連れて来て、炭鉱でいちばん深い危険な所で仕事をさせ、多くの方が死んだ。拉致はたしかにあかんけど、日本人がやっていた事実をちゃんと報道していない』と言っているのを聞いてはつ！としたものです。日本としての罪、事実はちゃんと伝えて政治をしないと拉致問題が政治、右派の道具になっているような気がしてなりません。』というご感想をいただいております。最後は、その事とも関係するんですが、「直接関係ないと思いたいが、国と国との間で領土の問題や核開発の問題など気になることが続いています。在日の皆さんはそのことをどのように考えておられるのか。また、私たち日本人は在日の方との関係でどう考えていくべきなのか。考えるヒントがあれば教えてください。」こういうことで答えは大変難しいと思うんですが、お二人、もしご意見をうかがえるのでしたらひと言ずつお答えください。

陳 太一（チン・テイル）：非常に難しい問題で最近尖閣諸島の問題とか問いただされて僕たちも胸が痛い思いをしているんですけど。国家レベルの話で僕たち庶民が担うことは、まずおかしいことで、僕たちは関係ないとは言えへん。でも、国家の話で庶民レベルに落とされて、それで僕たちが攻撃されるのは、やっぱり心が痛いと思います。そのためにも僕たち庶民レベルの段階で日ごろから交流を持ちたいということで、まさに東九条マダンがその場、そのものなんです。その場で僕たちを理解してもらって、また日本人のことも理解し、お互いに理解し合う。人との触れ合いによって、そういう国家レベルの問題というのはどっかで分かり合えないかなというふうに思っています。最近では画像の話とか、国家レベルの喧嘩の話ばかりで、やけに日本の右派の人間たちがデモまで起こして反対するというのは、もう庶民レベルの話じゃないし、僕たちは本当にここ日本に住んでいかなきゃいけないので、そのためにはどうしたらええかということも考えています。東九条マダンがひとつのきっかけかなというふうに思っています。

仲尾 宏：はい、ではカンさん。

康 玲子（カン・ヨンジャ）：先ほどのお話のように私たちは平和を願っています。それもとつてもジコチュー（自己中心的）な思いで。自分が平和でないと困るから、願っています。ジコチューな思いですから、これは本気な思いですということはお話させていただいたんですけども、チン・テイルさんは日本国籍で、私は韓国籍で、北朝鮮が核開発、核実験をやったと正直どきどきしながらニュースを観ています。もどかしく思いながらも自分の手が届かないですね。じゃあ、自分が今度の選挙でどこそこに投票したらどうなるとか、そんなじゃない問題ですよ。だから、どうしたらいいんだろう、私に何ができるんだろうって思いながら。けれども、このことで国家間の関係がどんどん

ぎくしゃくしていった、その果てには決裂していくようなことがもしこの先にあるんだとしたら、それだけは本当に避けてほしいことですよね。本当に簡単に口先だけで、そんなんやったらこうしてしまつたらええねんとか、ああしてしまつたらええねん、みたいな乱暴な言葉を耳にすることがありますけれども、私たちは、自分の命がそこにかかっているというような気持ちでニュースを観ていますので、とにかく話し合いで、国連を通じてとか、国際世論の力でとか、そういう形で収めてほしい。決裂ということだけにはならないで、今の状況を守っていく。もちろん、北朝鮮自身が変わらないといけない。それは北朝鮮の国民の責任ということがあると思いますけれども、それを見守りながら国際環境を整えるという協力ができるといふ知恵をずっと我慢強く出し続けていく。我慢強くでないとなかなか難しい問題だと思っています。腹立つから、簡単に、こうしてしまおう、みたいなことだけには絶対にならないようにというのをずっと願っています。

**仲尾 宏**：ありがとうございます。これは、在日の方々はルーツが朝鮮半島にあるということだけで、今もおっしゃいましたように、日本人とは別に今も重い課題が待ち構えていると。そのことを私たち日本人は、まず想像しなければいけないですね、

じゃあ、日本人として何ができるか。今も少し話が出ましたけれども、どんな世界の地域でも領土が接近していたり、国境を接していたりすると小さなトラブルは起こりがちです。それが起こった時にどうするかということについて、一人一人が考えることと、時の政府が国家というレベルでやったことについて、それが正しい方法なのかどうかということも冷静に考える余裕とか、頭脳を私たちは持っているんじゃないかと思うんです。マスコミは右であれ左であれ、扇動的な言葉で言うこと自体が問題でその方法で問題が処理できるわけではありません。つまり、国境を接しているとか、すぐ近い国とは問題が起こりがちですが、その時に問題を深刻化させないためにはどうしたらいい

いのか。どちらが100%、オールマイティ正しいということはあり得ないわけですから、その解決策の方法を日本政府はどのように見出ししていくのか、あるいは韓国政府、北朝鮮政府がどのように見通していくのか。そういうところで問題を立てるべきだと私は思っております。

そして、結論としては、やはりどんなことがあっても戦争をしない。それから、どんなことがあっても差別をせず偏見を持たないで物事を見つめ直していくという大原則だけは守りたい。ですから、在日の方に対してどうこうというよりも、日本人として日本社会を構成しているマジョリテイとして一体どう考えたらいいのかを出発点として私は考えていきたいと思っております。いろいろなご意見があると思いますが、そういう問題についてはそれなりのフォーラムやシンポジウムがあちこちでありますから、ご参加いただいてご意見を確かなものにしていただくとことを私からお願ひしたいと思っております。ちよつと時間が超過いたしましたけれども今日のフォーラムはこれで終わらせていただきます。また来週お越しください。

司会：長時間どうもありがとうございました。次回8日の金曜日同じ2時から開催いたします。ご都合のよろしい方はぜひご参加ください。先ほども申し上げましたが、あわせて二階展示室で写真展をしております。これは17日までの開催となっております。ぜひお立ち寄りくださいますようお願いいたします。ありがとうございます。

第二回 ■ 福祉の現場で在日を考える

■ 食文化の変化と在日

パネリスト

鄭 明愛 (チョン・ミヨンエ) 氏

李 連順 (イ・ヨンスン) 氏

コーディネーター

仲尾 宏氏 (京都造形芸術大学客員教授)

二〇二三年三月八日 (金) 開催



司会：ただいまより、第20回連続フォーラム「チョゴリときもの」2日目を開催します。  
今年の全体テーマは「在日コリアンの過去・現在・未来」です。

約100年前、先の世界大戦以前に植民地下、日本人として生きた時代から、新たに来日する人々も含め、その後在日コリアンは世代も交代し、ますます考え方や生き方が多様化しています。

先週初回にも申し上げておりますように、今年、このフォーラムは20年を迎えました。この時間は在日コリアンの歴史から見れば一部かもしれませんが。しかし、一つの節目としてこの時間を振り返りますと共に、今を確かめ、これから願うことなどを、本年は4名のパネリストに異なるテーマでお話いただいております。

先日も、お一人の在日コリアンの方がおっしゃいました。

数百年、1000年以上前に日本を生活の地に選択した朝鮮からの渡来人はそのルーツを残しながら、この国の人間となりました。もちろん現在制度上も生活することに不都合はありません。さまざまな理由や自身の意志ではなく近代に日本を生活の地と選んだ人々も、その子孫の多くは日本文化の中に生きています。この先、100年200年先になれば、差別としての呼称はなくなり、制度上の不都合もなくなるかもしれませんね。と。

国籍を始め、現在は1000年前に比べ、世界は格段に複雑になっています。しかし、ご自身の過ごされたところ豊かな人生から生まれた言葉として、ルーツを大切にしながら非常に大きなスパンで時間をとらえられていることに驚くと同時に、その時代を迎えた日本社会にまだ無理解が存在するとすれば、人々と国の未熟さが問われることになるだろう、と受け止めました。



それでは、本日のパネリストとコーディネーターをご紹介させていただきます。

お一人目は、NPO法人 京都コリアン生活センターエルファの鄭明愛（チョン・ミヨンエ）様です。

滋賀県公立高校で教職に就かれた後、在日コリアンの福祉問題（無年金問題）に取り組みながら、現在エルファで直接高齢者のお世話をされています。

お二人目は、榎ほし山 会長李連順様です。

主婦の手作りで始められたキムチづくりから会社を興し、京都で創業53年のキムチの老舗として、多くのファンを持つお店にされました。このお話はこの御本にもなっております。

そしてコーディネーターは、フォーラム第1回からコーディネーターをお願いしております京都造形芸術大学客員教授 仲尾宏先生です。

第一部パネリストのお話終了後、皆様のご質問等をいただき第2部につなげてまいります。また、途中に事業記録のため、後ろから時々写真を撮らせていただくがございます。ご理解賜りますようお願い申し上げます。

それでは、先生、よろしくお願いいたします。

仲尾 宏：それでは、本年度第二回目のチョゴリときものを開催いたします。今日はお2人の方にお話をいただくわけですが、最初お話いただく鄭明愛（チョン・ミョンエ）さんはNPO法人エルファの職員として日夜在日のお年寄りのために頑張っておられるわけです。エルファというのは、もうご存知の方も少なくないと思うんですけども、私の聞いているかぎりでは韓国慶尚南道（キョンサムナムド）の方言で、「ああよかったあ」とか、「素晴らしい」、つまり「アイゴ」の反対だと。「悲しい」ではなくて「いい。こりゃあ、よかったあ」というふうな意味で「エルファ」というような感嘆詞があるそうです。それは慶尚南道の方言ですから、同じ韓国の他の地域の方や在日の方でも、それは知らんなあというふうにおっしゃる方もあるんですが、今では略称としてそのように使ったおかげで京都だけでなく福祉関係の人にとっては、エルファというのは、ああ、あそこかということをすぐに分かっていただけになりました。

チョン・ミョンエさんはそこに長らくお勤めになられて在日一世の方々、もうお亡くなりになった方もおられますけれども、その方たちのお世話をしながら生きざまを見て、そして、またその人たちに献身的に介護をなさっている二世の方、その他の方を見てこられました。そういう三世の目で一世、二世のことを含めて今日はお話いただけると思います。それでは、チョン・ミョンエさん、よろしく願います。



鄭 明愛 氏

鄭 明愛（チョン・ミョンエ）：皆さん、こんにちは。アニョンハシムニカ。ご紹介いただきましたチョン・ミョンエと申します。よろしく願います。私は、京都で生まれ育ちまして、在日の三世になります。両親とも在日で、2人とも京都の出身になります。うちの家庭は、ハラボジ（おじいさん）ハルモニ（おばさん）は一緒に暮らしてなくて5人家族だったんですけども、年に数回親戚の家に行って、法事（チェサ）をするぐらいで、家の中では食卓にキムチは、たまにのついていたぐらいで、それ以外の

食生活は本当に日本的な家庭で育ちました。

私は、京都市立の小・中と京都府立高校を出まして、「民族教育」と言われるものは全く受けませんでした。物ごころついた頃からずっと通名を名乗っていましたが、母親が私に「アンニョンハシムニカ」とか「コマスミダ」とか「ア」「ヤ」「オ」「ヨ」「ウ」「ユ」というハングル文字を小学校時代にたまたま私たちきょうだいに教えてくれたんです。自分たちが朝鮮人やっていうことや、キムチも食卓に上がっていましたし、もうひとつの名前、通名を名乗ってましたが、これが本当の自分の名前なんだよということも母親からずっと聞いていました。

中学校になり自分が在日朝鮮人だということに対して悩みはじめまして、悶々としていましたが、高校に入って先生やいろいろな方々との出会いがありまして、高校3年生の途中から本名を名乗って、大学入学、卒業後もずっと本名を名乗って生活しています。自分自身在日として本名を名乗って日本の学校の教育現場に立って、こういう在日もいるんだよということと、在日の人たちが自分と同じように自分のことをコリアンだと言えないで生活している、日本社会のそういう差別状況も踏まえて、そういう問題にも取り組んでいきたいという思いもあって大学を卒業してからは教員を目指し、公立の高校や私学の高校で教員をしていましたが、なかなか実らないでいたんです。そういう時に大学時代に出会った障害のある人の親御さんから、京都で耳が聴こえない障害のある人たちが障害基礎年金を受けられないということで裁判を起こすので支援に参加しないかと言われて、在日障害者の無年金裁判支援に取り組み始めました。

それがきっかけで、エルファのチョン・ヒスン理事長とも出会ってエルファに勤めるようになりました。それ以降、聴覚障害の方との出会いもあり、エルファ法人内でも手話講座を毎年開くとか、在日の無年金問題、障害のある人と高齢の人が未だに年金が受けられない問題にも取り組みながらエルファで在日一世の高齢者の介護の仕事に携わり始めました。

仲尾先生にご紹介いただきましたように、私は京都で生まれ、育ち、私の両親も日本で生まれ育ちました。けれども、私のハラボジ、ハルモニも一世で、特にハルモニは結婚と同時に19歳で日本に渡ってきた。そういう人たちが、国際条項はないもののまったく生活や文化の違う中で日本の介護保険制度でちゃんとサービスが受けられるかという部分と実際に年金が受けられないという問題もあつて今まで苦労してこられたので、在日の二世、私の親世代の方々が手弁当で自分の親にせめてちゃんとした十分な介護サービスを受けられるように、そのサービスもきっちり理解して受けられるようにとエルファがスタートしました。エルファという言葉は今まで日本で何十年と苦労されてこられた一世の高齢者の方々がエルファに来られたら、「エルファ」という気分になれるようにつていうことで名前をつけてスタートしました。

介護保険制度といつたら、まず契約関係がありますし、なんでもサービスを受けたらハンコ（認印）を押して確認をとらねばなりません。ある一世のアボジが配食サービスを受けることになって、お弁当を持って来てくれはりました。そこで受領のサインのハンコを押してくださいつて言われたとたん、そのアボジが、「なんであなたにハンコを押さなあかんのやあー！」つて言つて怒り出さはつて、突き返さはつた。でも、実際にエルファの朝鮮語が分かる職員さんが事情を聞きに行くと、そのアボジはハンコを押せと言われた時に、親から聞いた話だけでも、ハンコを押したために自分の先祖代々守つてきた土地が植民地時代になくなつてしまつたと。そういうことが蘇つてきたんやという話がありました。

また、エルファの利用者さんたちの居住まいが違ふんですね。私もヘルパー2級の養成講座を受けましたが、実習で日本の介護施設に行きますと、日本の方に合う食事、すぐおとなしい方が多いんですね。レクリエーションなどで、日本の唱歌の赤とんぼを歌つたり、私も聞きなれた童謡と一緒に歌つたり、折り紙を折つたりということがあります。エルファの利用者さんは、そういう遊びははらへんのですね。歌は好きですけども、私が入つた当初

は利用者さんのほぼ99%が在日の一世の高齢者で、自分が子どもの時にお手伝いをしながら聞いていたオモニの口ずさんではった韓国・朝鮮の民謡とかを好んで歌ってはったんです。元氣だった時は、オツケチュムを踊って、チャンゴを叩いて民謡を歌うというレクをすごく楽しんでやりましたし、折り紙というのは折った習慣がない。また学校に行けなかった方がほとんどで、文字の読み書きができない。好きな遊びというと花札であるとか、おじゃみも触ったことがなく、赤とんぼも歌えないということで、それ以外の手を使う遊びをエルファでやってはる。一方で、またユニノリなどコリアンの伝統的な遊びもやったことがないのでわからない。食文化においても、器を持たないでスツカラ（スプーン）を使って食事をされます。食事の内容もやはりキムチが皆さんは大好きですし、日本の食事にはあまり使わないごま油で野菜を和える食事を提供したり、スプーンを使うスープ系の料理がお好きな方が多いです。今でもエルファでは、サムゲタン風のかしわスープ、肉スープとか、すじクツ（スープ）やビビンバも皆さん大好きで、そういうメニューを出しています。

そういうエルファのデイサービスで、一世の高齢者を見ると、亡くなった私のハルモニも私が子どもの時に遊びに行ったら、私が好きやった卵焼きをよう作ってくれましたが、自分が食べてはる食事はクツパ（スープの混ぜご飯）みたいなのを好んで食べてはったというのが思い出されるんですね。なので、私がエルファに入ってすぐに「ハルモニもエルファのデイサービスに来たらどうやろう？」と親に相談して、エルファを利用してもらうようになりました。私のハルモニも19歳で日本に来てはって、日常会話はなんとかできますが、契約書などの漢字がいっぱい並んでいる文語的な言葉は分からない。だから、介護認定調査、認定区分を決める時の調査に区役所の方とかが来られても言われる内容がほとんど分からないのですね。流暢に日本語を喋る人でしたが、文語的な言葉が分からないんです。そういう方ってきまって、なんでも「はい、はい」と頷かはるんです。だから介護認定調査に来はる時は、私も付き添って一緒に認定調査を受けていました。

—それから、うちのハルモニは孫の私と家で話をする時は、朝鮮語はいつさい喋りませんでした。ですが、エルファのデイサービスに行くようになってから、現場の職員さんに聞いてみると、朝鮮語をよく使っていたんですね。レクリエーションのカラオケの時間になると、マイクを離さへんぐらい朝鮮の民謡をずっと歌ってたそうなんです。孫の私にしてみたら、家でそんなハルモニを見たことがなかったので、80代にしてようやく自分のそのままの姿をエルファのデイサービスに行つて出してはったんやなあと思うと、そういうことがまったく分からなくて日本語ですつと喋つて接していたのが申し訳ないという思いも感じましたことがあります。

そのような一世のために介護サービスを立ち上げたエルファが、リーフレットがお手元にあるかと思いますが、東九条とウトロという地域にあるもう一ヶ所、西陣の立命館大学の東門の近くにハナマダン洛北とハナマダン洛西という下津林も在日コリアンの多住地域のひとつで、四カ所デイサービスを構えて、あと東九条にケアマネの事業所と訪問の事業所、それから障害のある方と共に働く作業所もやっています。それ以外にNPO法人エルファの事業として多文化交流活動、日本全国あるいは世界の方々からフィールドワークを受け入れて、デイサービスの在日一世の方と交流していただいています。エルファに来ておられる在日一世の高齢者の方々の歴史、生きてこられた経緯を説明してから、高齢者の方々と交流をしていただくという多文化交流活動は、年間エルファに一千人近くの来訪者があり、その度にデイサービスのオモニたちやアボジたちに来られた方々と交流していただいています。介護サービスなので、利用者の方々にお客さんの接待をさせてもええものかと最初は不安だったですが、それがどっこい、介護を受けなければならぬ方々ですが、お客さんを迎えたら自分の思いを伝えたいという思いでせいいっぱいお話をしてくださる。そういうことで、いい交流ができています。

それから、お配りした一枚の資料に書いてある私がエルファに入るきっかけになった在日の無年金の障害者と高齢者の問題については、今回はゆつくりお話できませんが、今エルファの在日の高齢者の利用者さんの大半が無年金で

す。年金に入りたくても入れなかった。国籍条項が撤廃された時点では、もうすでに高齢やったから制度にも入れない年になっていた。障害のある方は一定年齢以上の方、今51歳以上の障害を持っておられる方々はまったく障害基礎年金が受けられないという状態になっていまして、裁判まで起こしてやってきたんですけども、なかなか日本の国で救済措置はとられず、現在に至っていて、京都府、京都市独自の給付金制度を設けています。介護保険制度には利用者負担がありますが、高齢基礎年金が受けられる方と受けられない方では、利用者負担の金額も変わってきます。エルファでもそういう問題に取り組みながら、一世の高齢者の方々の生活全般をサポートできるように活動しています。

ちよつと話が変わるんですけども、私はエルファに入ってから今年で10年目になります。日本の学校でずっと教育を受けてきましたので、恥ずかしながら、10年目の今でも母国語はほんのちよつとしか分からないんです。エルファのデイスーツに來られる方々のうち昔は99%近くが一世の方だったんですが、今はだいたいぶ亡くなられて半分ぐらいに減っています。半分が二世の方や戦後新しく來られた方で脳梗塞になって介護サービスをを受けておられます。私自身は生い立ちが民族教育も受けてなくて、思春期に入った時に、自分はなぜ日本で生まれたんだ、自分は朝鮮人と言われているのに、なんで日本で生まれて、日本で生活しているんだと。日本で生まれたんやったら日本人じゃないの？っていう疑問から、自分をすごくマイナスに捉えて、日本人になりたい、日本人として大きくなっていこうと思っていた頃がありました。小学校後半から中学校、高校と本名を名乗るまでは自分自身は日本人として生きていこうという思いを持っていました。本名を名乗り出してからの自分は、この日本社会で在日の人たちがなぜこんなに生きにくい状況にあるんだと。私の父も日本の会社に勤めて通名ですと仕事をしていましたし、その会社を辞めてからは在日の先輩がやってはる会社に入ってからまだ働いてますが、やっぱり商売関係の仕事なので通名を使っています。それがい

いか悪いかは別としてでも、通名を使わざるを得なかった在日ということについては、自分自身も自分のアイデンティティーを形成するにあたって、すごく自分を卑下した、マイナスに捉えて大きくなったという生い立ちに関してはなにかかしたいという思いがあります。だから、そういう子どもたちをできるだけ勇気づけたいし、日本の子どもたちにもそうじゃない日本社会を作っていこうという思いを伝えたくって学校の先生になりたいと思ったこともあります。

エルファで働きたしたのは30代でしたが、一世のコリアン独特の居住まいを見て、あっ！自分と共通する部分もあるんやなああと、私もそうなんですけど、食事に対するこだわりはすごいんですね。日本では、食事を出されたら、それをありがたくいただく。謙虚にいただくことが文化じゃないですか。日本のデイスービスとか施設ってそうだったんですね、実習に行った時に。でも、エルファで仕事を始めてから感じたんですけど、「こんなキムチまずくて食べられへん！」とか、「このすじクツは何や！この味は何や！こんな出したらあかんわ！」っていう利用者さんの食事に対するクレームがすごく多かったです。それは、ありがたい意見やということで私たち職員も頑張って利用者さんの口に合うように積極的に研究して、研究して料理を作ってきたんですけども、やっぱりこんなにストレートに食事に関してクレームをつけてきはるといっているのは在日コリアンならではのなんじゃないかなと自分が仕事でいろんな所で関わってきた中ですごくそれを感じるようになりました。私の家はそんなに裕福なほうじゃなかったんですけど、やっぱり食に関してはお腹いっぱいになるぐらいは食べさせてもらえたなど。食に関して不自由はしてこなかった。学校とかいろんな面では、きびしく言われてきましたが、食事に関しては自分が辛いなあと思ったこともないなあと思っています。

それから、東九条ハナダンのデイスービスにしていると喧嘩のような言い合いが多いんですね。でも、言い合いをされても、「もう来ないわー」って言う人はあまりいらっしやらないんです。言い合いをされたいことを言わはって、それで済んで毎日のリズムが流れていく。はたから見ても、えっ！また喧嘩してはんの？っていうふうに私なんか

思ったりもしていたんですけども、在日の一世の高齢者の方々にとっては、お互いの言いたいことをばっばつぱつぱつと言い合ってやっていくことがコミュニケーションのひとつじゃないかなあと思ったりもしています。そういう様子が在日の高齢者だけなのかなあと思ったら、実はそうじゃないんですね。日本人の高齢者の中にもそういう方もいらっしゃるって、今までの日本人の利用者さんってほとんどいらつしやんなかったんですね。いらつしやっても1人、2人ぐらいだったんですけど、10年以上エルファをやってしていると日本人の利用者さんも何人か増えてはるんです。そのうちの何人かはよそのデイサービスに行つてはったんですけど馴染まない。喧嘩をされて1人ぼつんとされていた。その人のケアマネさんが、エルファやったら合うんちゃうかっていうことで紹介されて来たった方がエルファの雰囲気にはばつちり合つた。そういう日本人の高齢者の方もいらつしやっています。

また、10年以上エルファのデイサービスをしていると、一世から二世にだんだん世代交代をしてはるんですね。ちよつと淋しい思いもするんですが、レクで歌つてはる歌も朝鮮の民謡ばかりだったのが、私でも聞いたことがある日本の演歌が聞かれるようになって、変わってきたなあと感じます。一方で、エルファの四カ所デイサービスにいらつしやる利用者さんでも、東九条の利用者さんと西陣の近くの利用者さんと違うんですね。同じ在日の一世ですが、京都のそれぞれの地域で60年以上暮らして、仕事もされて共通する部分もありますが、西陣の近くに長年住んでおられた方と南の東九条とか伏見に住んでおられた方とはやつぱり違う。西陣の、京都人っぽい雰囲気や在日コリアンの一世の方でも持つてはりますし、デイサービスもそんな雰囲気があります。どちらかというと、言いたいことを言わはって、ちよつと言い合いつぽくなるのは東九条のデイサービスのほうが多かつたりします。そういう土地柄も一世の方は受けてこられてるんだなあと感じます。

今日お配りしたこの通信の中の「ある在日一世のオモニ」のことを最後に紹介して終わりたいと思います。私は自分のアイデンティティーのことをずつと考えてきてライフワークとしても在日コリアンのアイデンティティーの問題

に取りくみたい、そして自分のことを知る教育を受ける機会を保障することは日本に住んでいる外国人の方でも大事だと思っています。その一つとして、こんな在日一世の高齢者の方もいらっしやいます。最初はデイサービスの職員が日本人の利用者さんだと聞いて事前訪問に行きました。そして、いろいろ話を聞いているうちにそのオモニが自分は実は在日なんやと。でも、いろいろあつて小さい時に日本人の両親に育てられて大きくなって、本当によくしてもらつたし、結婚したのも日本人の男性で、子どもさんも日本人としてずっと育ててきたという80代の方で、その方が事前訪問に行った職員に在日なんやけども子どもや孫には言わんといほしい。けれども、ちょっと興味があるからエルファも一回見学に行つてみたいと言わはつたんですね。見学に行つて帰らるる時に、「終つた人生は取り戻せないけれども、エルファに行つて人生を生きなおせるんやということを実感した。」とおっしゃつたんです。それを聞いた職員はその場で涙してしまつた。「80代になつてエルファに行つて初めてひと晩ぐっすり眠れた。」とおっしゃつて、それ以降は本名を名のつてエルファにも生き生きとして来られています。そういう在日一世の方もいらっしやるんやなど。三世の私が悩んできたアイデンティティーの問題ですが、人生80年以上、自分を人間関係の中で出せない人生を送つてこられた在日一世の言葉の重みにぐつと胸がつまりました。エルファは介護の場であっても、こういう問題に常に考え取り組んでいかなきゃいけないということをすごく感じました。

私には、2歳と5歳の子どもがいますが、日本で育てていくにあつて、どんな教育を選んだらいいのか、今自分の中ですごく悩んでいます。家庭教育は大事やし、子どもたちにはコリアンとして名前も民族的な名前をつけましたが、どんなふう成長してほしいかということ、エルファで仕事をしている人たちと出合つて考えているところ。ありがとうございます。

仲尾 宏…ありがとうございます。チョン・ミヨンエさんのお話を聞いていると、今おそらく80代後半の方が一世ですが、その姿がちよっと目に浮かぶような気がしてまいりました。

次にご紹介するのは李連順（リ・レンジュン）さんです。日本語読みですけれども。お話を伺います。在日二世と書いておられますが、二世のはしりですよね。二世の大先輩ということになります。ご存じの方も多いと思いますが、「ほし山」というキムチ専門の会社をおつくりになって、京都では大変評判になっている会社であり、キムチであります。かくいう私ももうここ数十年、私の家にはお漬物はありません。キムチだけになってしまいました。ある時友達に来て、キムチしかないと言ったら呆れていましたけれども、すっかりはまってしまっているんですね。食べてみるととにかく欠かせない。その美味しいキムチを作っていたらいてる李連順（リ・レンジュン）さんにお話を伺います。限られた時間ですがよろしく願います。



李 連順（イ・ヨンスン）…韓国読みではイ・ヨンスンと申します。今日はこのようにお集まりいただきましてありがとうございます。そしてね、まだ息がはあはあとしているんです。なんとか1歳でも若く見せようかなということはお上手なのに、やっぱり歳は80やなど来るとき、思いながら一人で笑ってしまいました。私は東京にお嫁に行きまして、夫は英語の教師をしてたんですが、ちよつとそういうところの窮屈な生活はかなわんというので、京都の実家の親が一度京都へ来たらなんとかなるからということで、昭和34年に来たんですね。何かやらんと

いかんなあとということで、さて、何をやるって言うてもね、もう2人の子持ちで、女で、なんの技術も、学歴もないし、それでキムチだったらなんとかということやってみようって思ったんです。私はそれまでキムチを漬けたことがなかったんです。私の母はとて下手な人でキムチが上手に作れない。仲のよい父母だったんですが、父の「キムチがなんでこんなにまずいんや。」って言うことが喧嘩の種になるぐらい下手だったんです。嫁ぎ先の姑さんが作っていらっしやったキムチがとて美味しかったんです。それで、あつ！キムチってこんなに美味しいもんだ。それで手取り足取りで教えてもらったわけじゃないんです。ただ、漬けてはんのをじつと見てて、見よう見まねで、それでなんとかなるだろうって。ニンニクと唐辛子とアミの塩辛と、こうして、こうして漬けてはったなあみたいな。

で、在日に売るとは思っていないません。京都はやっばりお漬物の都市ですから、お漬物屋さんへ。当時はお漬物専門店じゃないんですよ。ほとんど味噌、醤油から全てを売っているよろず屋さんへ。そこへ売らんとあかんのやし、日本の方の口に合うようにもせんとあかんし、辛いのはやめときましょ、と言ってちよつと辛さもニンニクも控えめで、さあ作って出かけましょうと思いましたら、ちよつと気おくれするんですね。働いたこともないし、そういうことをやったことがないので。でも、不思議なもので、夫に、「私、やっばりよう行かんわ。作ったけど。あなた行って、セールスしてきて。」と言ったら、「ううむ」とよう返事せんと、「京都みたいなこんな保守的な街で、君キムチが売れると思うか。」って。やってみなければ分からないじゃないって言って、ほろ自転車に載せて出かけて。子どもの頃から私が知っている自分の実家の近くに行つて、おそるおそる「これ。置いてもらえませんか。委託でけっこうです。」そしたら、「それ、ニンニクが入っているんやったら…」「もちろん、キムチです。少しは入っています。」「もう、そんな臭いのはかなわん、持つて帰つてくれ！」って。もうにべもないんですね。やっばり無理かなあつて思いながら、自転車家をのほうに向けて帰りかけたんです。壬生寺つてご存知ですよ？あの壬生寺のところをまた戻りかけ

たんですよ。止まって、これではね、一軒目ではねと思つて、今度はまた西のほうに向かつて走つて、魚まで置いていらつしやるような大きなよろずやさんで、実はこうこうで、置いてもらえますか？と言つたら、「ああ、いいよ。」つておつしやるんですよ。そのために来ているのに、ええーつて思つた瞬間でした。「それでいくつあるの？」つて言うから、「30ちよつとぐらいいです。」つて言つたら、「全部置いてつき」つておつしやるんですね。もう嬉しくつてね、本当にどうやって家へ帰つたか覚えてないんですよ。主人に、こうこうやつたつて言つたら、反応があまりないんですよ、よかつたねとか、ああそうかとも言わず、黙つて聞いているんですね。

それで、今度は、さあ、売れたか、売れてないかが私にとつては大変なことだつたんです。行かなくっちゃいけないんだけど、私の漬けたキムチがビニールでこうしてこうしてくくくつてある。店のどこかに片寄せ合つてじつとしていたらどうしよう、そんな姿見とくないし、どうしよう…でも、行かないといけない。4、5日してから行つたんです。お店の中にいらつしやつて、きよるきよるつてこうして見たら、ないんですよ。もういつペン端から順番にずつと見たんです。それでもないんです。それ、そんなおかしい話はない。売るために置いてきたし、売れていることを確かめに来たのに、ないことが不思議でならないんです、その時の自分の気持ちだね。したら、中からご主人さんが出てこられて、「あつーあんた待つていた。」つて、おつしやるんです。「みんなが売れたよ。だから、今度来る時は50個ほど持つてきて。」つておつしやるんですよ。もう本当に嬉しくつてね、それこそ飛ぶように帰つて、今から52年前500円だけで漬けたキムチだつたんです。白菜を買つてね。そんなことは言つてられないし、中央市場が近かつたんです、坊城のところでしたからね。20kgぐらい箱に入れてね。当時私は体重が40kgぐらいしかなかつたんです。細い、細くてね。小柄などこの馬の骨とも分らないものが、こないして白菜を買つて、漬けて、そこへ卸し。

と、もう一軒印象に残っているのが、京都の家つてうなぎの寝床ですーつと長いじゃないですかね、入口にお漬物、味噌、醤油を売つていらして、おじいさんとおばあさんが店番をしていらつしやるんですよ。こうこうで置いてもら

えますか?と言ったら、「それ、ニンニクが入ってるね?」って。「はい、入ってます。」ああ、もう駄目やあと内心  
思いましたが、今度おじいさんとおばあさんが何か話し合うんですよ。いらんともおっしゃらないで。なんかお話し  
ていらっしゃるのか、なんだろうなあと思っって、こうしてたら、おじいさんかおばあさんのどちらかがね、「皇太子  
様が(今の天皇陛下)カレーの中にニンニクを入れて食べてはる。聞いたことがある。」っていう夫婦の話なんです。  
あつ!そうか、なるほど、カレーにはニンニク入れる。ほなら、もううてもええのんちがうかっていう結論なんです  
ね。でも、実にその時代の、その年代の人の納得する、置いてもいいという理由の一つ。なるほどなあって。ただた  
だ、感謝で嬉しかったです。私の漬けたキムチがこして店先に商品として置いてくださる。その気持ちはね、本当に  
嬉しくってね、やっぱり生涯忘れませんね、この2軒目とここのお話は。

そういうことがあります、大手のお漬物屋さんも自分とこに卸してくれないかっていうようなお話もありました  
し、本当にね、無我夢中ですね。夫は、配達は行ってくれるんですけどね。私が一人で漬けて、集金してくるんですね、  
前に売れた物をね。「君、こんなにお金を貰っていいのかなあ:」って夫が私に言うんですよ。「あなた、お漬物を  
漬けて行ったんだから、売れたらちゃんとくださるんや。」と言っって笑ったことがあります。そんなこんなでやっ  
ているうちに10年、20年経ちますと、私が最初に回ったら、「そのキムチにんにく入ってるんやろ」と聞かれ「はい」  
と答えると、断わられてしまいました。口の中と食べ物に困境はないはずや。心の中に38度線なんて絶対あらへん  
から、それを信じてやりたいと。その信念を私がずっと持つてやらなければ途中でしんどいことがあったら放棄しちゃう  
だろうと思ひまして、それからはひたすら味も変えしながら漬けてきました。

今日の資料のこの中に、「食文化の変化と在日」というのがありますが、在日の二世である私は今はもう80になり  
ました、25歳から始めまして。その間に本当にこの食文化の流れというんですか、先生が先ほど、「うちはもう日本  
漬けはなくなっってしまった、食卓から。」っておっしゃいましたように、今やスーパでもキムチが売り上げの

半分なんですって。でも、在日の私はだんだん日本人になってきています。分かってくださるかな？ぬか漬けが大好きです。会社でも材料はいっぱいありますから、そっとぬか漬けを漬けていただきます。お茶漬けにしたり…それが自分でも考えられるほどお互いがこの食文化を通して変わっていくというんですかね。

25年ぐらい経ってから小さなお店をちよつと構えたんですよ。小売をしようということですね。それまでは卸しだけ。持つて行って売っていただいたのをやってみると、やはり自分で管理できない。酸っぱくなっても駄目だしということとで、お店を持つということと、また一から始めまして、やっている和在日の方が、当時は一世もまだ元気な時代ですよ。当時の在日は絆が強いんですね。一族、本家、それから子どもがいたら分家になって、韓国の人の場合は、法事は命日に必ずやるんです。だから、その仏さんが5人いたら五回あるんですよ。それもお線香を立ててって、そんなんじゃないんですね。山海の珍味を並べて、その都度また一族で集まって、こないして、よくご覧になりますよ、こうしてね、屏風を立てて名前を書いてやるんです。そんなんで一族の法事があると、そのお嫁さんたちがだあーと買いにみえて、在日の人たちがちよつと音信が不通だった人とはったり会うんですね、そういう特徴ですから、在日の人たちばかり集まっているんですから。そうすると買い物はどうでもいいんですよ。今どうしたの？どこにいるの？子どもさんは何人？お母さんは？というのが話題ですね。「この近くに喫茶店がありますよ。」って言ったら、「このまま置いといて後で買いに来るわ。」って言ってね、私も、職場ってこんな素晴らしいところもあるんだわってね、一人で笑いながらお商売をして。

ある日、ちよつとおお客様がどなたもいらつしやらなくて、私がお店番をして、その時に、初老の男性が「これ、キムチですね？」っておっしゃるんですよ。「はい、そうです。」って言ったら、「いやあ、実は私は日本人なだけけど、戦時中に結核（当時の肺病）で水を使わせてもらえなかった。疎開に行っている時に。」疎開ってお分かりですか？戦争中に皆空襲におうたらかなわん言うって行くんですよ、京都で言うたら丹波とか。私たちも行きましたからね。疎

開に行った先で、「あんた結核だから井戸水を使わんといて。」って言われて、使わせてもらえなかつたんですって。それで困り果てて、当時在日は在日の人たちの部落があつたんですね。そこへ行きまして、こうこういう理由でお水使わせてもらつていいですか？って言ったたら、「どうぞ、どうぞ、いくらでも使つて。キムチってこんなんやし食べやあ。」って、キムチをそれから食べることになつたんですって。それで、自分はキムチと縁があるということをお話してくださつたんですよ。私は、本当にいろんな意味で、今でもこのお話の内容というのをここにちゃんとしまつて忘れることはありませんね。そういう出会いもあったり。

在日がだんだんキムチを食べなくなりました。孫なんかでもあまり食べませんし、たしかに臭い、臭う。食べた時は美味しいんですがね、臭うということ。で、今から20年ほど前、日本人の若い人が、「キムチって日本語やと思つていた！」って。聞いたほうがびっくりして、ええ？なんで？って聞き直すぐらいにキムチがこんなに普及して当たり前になつたんだという驚きというのか。できたら、私は、この言葉は使いたくないんですが、やっぱり一世の人たちが韓国・朝鮮から渡つて来て必死で生きていた時に、「ご飯」と「キムチ」と「もやし（中華もやしではなく大豆の）」さえあれば、生きられたんです。考えてみたら、私の嫁ぎ先でさせられたというんですか、しなさいということも教えてもらったのは、布を敷いて豆、その上に藁みたいのをかけて毎日水をやつた。夜中も水をやる。そうするともしがこうやつて伸びてくるわけ。上から取つて、ナムルにしたり、スープにしたりして。今考えたらなるほど、これはタンパク質ですよ、畑の肉つて言うじゃないですか、大豆は。なるほど、貧しくつてももやしとキムチとご飯でしのいできた。なかなかお肉とか、お魚とかはなくても、これさえあれば生きてこられるということ聞きまして。キムチのこの素晴らしさ、そして乳酸菌がいっぱい。韓国の人は酸っぱくなつたのがキムチだと思つている。日本の方はキムチがちよつと酸っぱくなると腐つてるとおっしゃる。日本でも発酵したお漬物がありますけど、ほとんどありませんわね。よつぽど好きな方ぐらいで。だけど、韓国の人は酸っぱくなつたまんまをチゲに入れたり、焼き飯

に使ったり、一切れも捨てないです。

そんなんこんなんで一世の人たちは子どもを育て、学校へやり。もやしとキムチとご飯で3年過ごせたら息子をそのお金で大学へ行かせ、卒業させられると。そういうキムチと実際にそれをなさってこられた一世も貧しい方はたくさんいらっしやっただけです。なるほどなあと。もちろん、たまにはめんたいとか、イワシとかは買っていたけれども、基本的には、そういう経済観念というんでしょうか。それでいてちゃんと身体も出来上がっているみたいなところで。

キムチがごくごく当たり前になって、先ほども言いましたように、在日がとても日本というのが好きになって、日本の方もキムチがお好きになられる。こうして「食」って昔の人も、外国からいろんな人が来て、そこで自分の国の食をつくり、食べているうちに、皆さんの間にいろんな国のいろんな食がこうして根付いていったのかなあって、私、最近思います。ただ、日本と韓国は似ているんです。野菜といえはみな漬けちゃう。漬けられそうな野菜はみなお漬物にしちゃう。でも、中国は違う。ザーサイとか、なにもかも塩漬けにしないと、と思うんですよ。日本のお漬物は200種類ぐらいありますね。お醤油から味噌漬けから全部したらね。韓国は言っても、ありますが日本のことを思ったら、粕漬けから、そういうものありませんからね。韓国は「汁の文化」なんです。お汁が大好き。お汁(つゆ)系ね。だから、お漬物までお汁(つゆ)を作っちゃうんですね。水キムチと言っています、水の中で野菜を発酵させる、その水が乳酸菌になりまして、もちろん塩と野菜が入っていますので夏の暑い時に、そのお漬物を、先ほどおっしゃったようにスプーンでぐーっと水をいただく。うちでも水キムチを売っていますが、皆さん、最初分らない時はあれをみな捨てられるんですよ。メリケン粉とかごはんのとき汁で炊いたお水に菜っ葉とか、大根とか、キュウリとかを漬けるんです。水キムチを買って帰られた方は水を全部捨てて中のものだけを召し上がると。在日の人が焼き肉ひとつにしても、あるおばあちゃんが平屋の長屋の表の間をひと部屋落としてホルモンを焼いて売ったらお客さん

が来てくれはった。どぶろくを作って、出す。当時キムチはお金をいただけなかった。」「どうぞ、これキムチ」って、こうこうこうだつてっていうキムチの伝え方もあったんだなあ。

そして、この「焼き肉文化」も今や日本の方は企業として何十店舗も、百店舗も持って焼き肉屋をやっけていらっしやる。そういうことがこんなに根付いたんだなあ、私がどんな山奥に旅行に行こうがどんな海辺の所へ行こうが必ず焼き肉屋さんってあるんですね、不思議と。ああ津々浦々在日の人って渡って来て、こうして食文化もお互いに広め合い、また日本の食文化も自分たちが喜んで、自分たちのものにして生きてこられたんだなあつくづく思いました。

**仲尾 宏**：ありがとうございます。在日の生き方がどうこうという難しい話よりも、「焼き肉」あるいは「キムチ」を通じて日本社会がどのように変わってきたか。そして、在日の方が日本文化をどのように利用されてきたのかということが生き生きと分かるお話をいただきました。それでは、まだ皆さん方もいろいろお尋ねになりたいことがあると思いますので、これから休憩をはさんで皆さん方のご質問についてお2人からお答えいただくことにいたします。

**司会**：では、第一部を終了いたしました。皆様のご質問で第二部につなげてまいります。開始時間は20分の予定とさせていただきます。二階の写真展の写真家は、実はここにいらっしやいます中山さんです。中山さんからお写真をお借りしまして、展示させていただきます。

休憩時間かお帰りの時にどうぞ写真展へ足をお運びください。

司会：第二部を開催いたします。



仲尾 宏：それでは、第二部を開催いたします。ご質問とご意見をいただいております。まず、ご質問に入る前に、最初の方から、一つ提案がありますのでお諮りいたします。「2年前のチヨゴリときものの終了時に東日本大震災が起きた。すぐに帰ることもできず、会館のテレビを観ていた記憶があります。今回のテーマは、過去・現在・未来となっています。このテーマには参加者それぞれの思いがあると思いますが、私は、風化させないことと思います。在日の問題を風化させないと同じく大震災も風化させてはならないと考えています。皆さんの合意を得るようなら黙祷しませんか？」というご提案です。おっしゃる通り、当日私もここにおりまして、この方と同じようにこの下のテレビを観ておりました。そして、昨年は3月18日でしたけれども、やはりこのフォーラムがありました。皆さんにご提案して、短い時間ですが、黙祷を捧げました。もし、皆さんにご賛同いただけるならば、この場で黙祷を捧げましょうか。ご起立願います。それでは、3・11東日本大震災、原発爆発による多くの犠牲者の方のご冥福と心と身体のご快癒を祈って黙祷を捧げます。(黙祷)

お直りください。どうもありがとうございます。皆様方のご質問にまずお答えいたしました。チヨゴさんへ。エルファさんでは、日本人の職員がおいでになりますか。おいでになる場合は、その日本人の仕事ぶりや

悩みについて。いない場合は、その理由についてお聞かせください。」こういうご質問です。よろしくお願ひします。

鄭明愛（チオン・ミョンエ）……質問ありがとうございます。エルファは、今法人全体で非常勤と常勤を含めて職員が約70人います。そのうち、一割が日本人の職員も働いています。デイサービスに入っている職員を振りかえって、私は努力不足なんですけど、本当に熱心に言葉を勉強しています。利用者さんは歌を歌って遊ぶのが大好きなので、韓国の民謡や今の若い人の歌も含めてハンゲルの歌を練習してレクで一緒に歌っています。私なんか足元にも及ばないぐらい、利用者さんが来られたら、挨拶から、ある程度の簡単な会話まで韓国・朝鮮語で話しかけて積極的に関わられるのすごいなあという印象があります。

自分の友人に在日の人がいてということ、そこから在日についての問題意識を持ち、エルファへ見学に来られて働きだした人がおられます。何らか在日の問題意識や興味を持って来られた方もいらっしゃいますし、作業所では韓流ブームで韓国が大ファンでここに来たらそういう話ができたり、韓国語も勉強できるんちゃうかということで来てくれる人もいました。

在日の高齢者の方々と関わっての悩みと言いますと、今の利用者さんからすると、私なんか孫みたいな世代なんです。だから、スタッフの中でも親世代の職員と私ぐらいか、もうちょっと若い職員がいて、利用者さんは私みたいな若いもんには孫みたいな接し方をしてくれはるんですよ。「ねえちゃん、よう頑張ってるなあ。」みたいな感じで、「いつもありがとう。」とか、「そんなんせんとき、私ができるから。」と逆に動こうとしてはったりするぐらい、若い人に対して、かわいい、かわいいうって感じで見てください。逆に私の親世代の二世の人、しかも、母



国語を話せる人にはチャンソリ（文句）も自然に言わはったりします。世代世代によって利用者さんもうまく使い分けておられるというか、世代が近い人の方が頼りやすいんでしょうね。私も介護をしている時に、もつと甘えてという思いはあったのですが、やっぱり私を孫としてしか接してくれはらへんかった。ある程度気をつかいながら関わってくれてはったし、日本人の職員さんに対してもそんな感じなんです。 「よう頑張ってくれてるなあ。私ら朝鮮人のためにようここまでやってくれるなあ。あんたら他のいい仕事をしたらどうなんや。」と言わはるぐらい気をつかってくれはる。でも、慣れていったら、また変わるんでしょうね。

また、法人に、若い方から高齢の方まで多国籍のボランティアさんが来てくださいます。後から考えてみたら面白い話なんです、やっぱり文化の違いなんでしょうね。女性でずっとボランティアに来てくれた方が、事務所になちよつと相談したいことがあると話をしに来はったんです。その方は、まだ結婚をされてなくて、利用者さんが、「あなた、結婚せえへんのか？子どもはいらんのか？」などきいてこられると。私も介護をしていた時に、「ねえちゃん、結婚まだか？うち、孫がおるんやけど、どうや？」というようなことを何度か確かに言われたことがあります。そういう自分のプライベートな部分を何回も何回も聞かれるのはやっぱりしんどいということをボランティアさんはおっしゃっていったんですね。それもそうやわな。それはある意味セクハラやし、女性差別やし、たしかにそうやわなつて思いながらも、ある一面民族性の部分？、つついつつこんで、良いか悪いかは別として、なんやかんやつつこんで関わって、関わりとうしはるようなところがあつて、プライベートなところまで、やっぱり話を聞いてきはる。その女性にとってはしんどかったし、気をつけていかなあかんあということなんですけれども、在日の高齢者にとつてみれば、親近感がわいて、おそらくそのボランティアの女性のことをほんまに心配して、あるいは、どうしてるんやろなあ、大丈夫なんやろかなあみたいな気持ちでいろいろ話を聞いてはった、そういうことを私と事務局長はこれっで民族性かなあと振り返っていました。異文化の違いを感じさせるエピソードです。



**仲尾 宏**：いろいろ楽しい話、考えさせる話をお聞かせいただきありがとうございます。それから、エルファの中に日本人がいるかということですが、実は、私も創立の時からエルファの副理事長を務めさせていただいております。私以外にも、理事の中に日本人が1人、2人入っております。というのは、エルファの在日のお年寄りの問題というのは日本社会と日本の歴史が生み出したもので、私は日本人の1人としてそのことについて責任があるし、その責任を私なりに果たせる力があれば果たしたいというところで喜んでさせていただいております。

もうひとつは、チョン・ミヨンエさんが作ってくれた一枚ものの年表がありますね。その中に1952年のことが出ております。52年のところをちょっと読んでいただけますか。

**鄭明愛**（チョン・ミヨンエ）：1952年、日本がサンフランシスコ講和条約を批准することによってその当時の旧植民地出身者である在日コリアン等は日本国籍がなくなったとともに、社会保障制度からも排除されました。

**仲尾 宏**：ありがとうございます。それは何を意味しているかということと、最新のテレビや新聞を見ていますと、1952年4月28日から今年4月28日でちょうど60年の節目ですね。安倍総理は、記念日として何か政府の行事をしたいということを考えておられるようです。しかし、この52年4月28日を境にして在日の方が日本の国籍がなくなってしまったために無年金状態におかれたということなどを、おそらく安倍総理はご存じないんじゃないかと思うんです。日本人にとっては占領が終わったという意味での節目でしょうけれども、在日の方にとっては、それまで潜在的に日本国籍があったにもかかわらず、国籍がないと日本政府から一方的に宣言さ

れたことによって、国籍を必要とするさまざまな職業に就けない。あるいは、年金に代表的に見られるような社会保障からも排除されてしまうということになったんです。だから、私は4月28日を記念日にするならば、そのことを日本人は思い出す必要があるんじゃないかと思っております。エルファの日本人問題の関連で私なりに思いついたことを申し上げさせていただきます。

それでは、次の方のご感想プラス、リ・レンジュンさんへのご質問です。「食について。京都では何でも京風になると言われます。また、今日、和と洋のコラボ大盛で、和とイタリアン、和とフレンチとか、抹茶を使ったスイーツとか、京野菜を使った西洋料理とか大流行です。（私自身は少し懐疑的ですが）特に京風になったとか、意識的にそういう商品開発をしたとかということはどうですか。」というのが第一番目の質問です。それから、「少しお話の中にも出ていましたが、ニンニクを減らすとか薄味にするとかということでしょうか。」これが二番目の質問です。その道の大先輩であるリ・レンジュンさんにお問い合わせいたします。



李連順（イ・ヨンスン）：そうですね。今ニンニクは当たり前ですよね。ただし、さすがに京料理には入れませんよね、懐石料理とかはほとんど入れることはないと思いますけど。臭みをちよつと消すぐらいのところかな、表に出さないでニンニクの役目をどっかで作るかなあ、使うかなあぐらいのことです。京風と商品開発っていうところまではいかないのですが、お漬物のキムチで「白キムチ」というのを作りました。というのは、普通塩漬のところにはヤンニョムジャンと言っています、キムチのタレを塗るわけなんです、私は、白菜が白いままで、塩漬の段階で即しみ込ませてあるっていうんですか、だから、食べた時にすぐニンニクの臭いもしないし、辛くもない。

一つのパックに昆布を入れて、タカノツメの赤いのをこうして、松の実をちよつと乗せて、ニンニクの芽ってありますよね、あれをちよつと散らしてというのは作りました。私がなんでこれを作るうかなと思ったのは、日本の漬物の素晴らしい色彩ですね。一応いろんな写真を撮ってくださいるんですよ、うちも商品の紹介をする時に。どんなに腕が良くて、どんなに素晴らしいカメラでも、キムチの綺麗なのは無理です。なんでもアカン。なんでもどろつとして赤く。京漬物の宣伝なんかで、カタログとかを見ますと、千枚漬けの薄いのをさつと3枚くらいして、タカノツメを一個ちよつとのせて、そして壬生菜も昆布をちよつと置いたら絵になるんですよ、それだけで。これがくやくしくつて、くやくしくつて、羨ましくつてね。それで考えたらいっぺんこれはやつてみましょうと思つてすると、やつぱりファンがちよつとずつ増えて、来ていただいて、ああ嬉しいなと。ある料理学校の先生が、これ本当に美味しいねと。でも、やつぱりちよつとお醤油をかけてくださいと、売る時に一滴でいいから。たしかに一滴かけると和風になりまして、そういうことを今もやつています。

仲尾 宏…ありがとうございます。今日本のお漬物の色のおつしやいましたけども、韓国のナムルもそうですね。キムチが朱色です。ホウレンソウが緑色、もやしの黄色、ぜんまいの茶色と、実に彩が美味しく見えるように並べられているので、箸が進んでしまいますね。やつぱり食感というのは、どの料理でも色がとても大事ですね。何かその辺のことについてもし追加がございましたら。

李連順(イ・ヨンスン)…そうですね、五つの色には、それぞれの栄養があるんです。色で決まるぐらいの栄養がある。五色五味で、ちゃんと理由もありまして綺麗ですね。茶に緑に、そして白はお大根をなますのようにしてもいいし、ごま油で少し炒めてもいいし、もやしは黄色で、人参もごま油で少し薄塩で炒める。だから、五色五味でそれぞれ栄

養価があつて、昔はどこの家でもお汁にナムルにキムチというものがあつて、お酒があるとか。十分に栄養があつたんです。そして、サバやイワシを煮る時でも、お大根は必ず一緒に炊くんです。お魚の下に大根を入れる。今みたいな丁寧な料理法じゃなくつて、大根を切らないでそぐんです。そうすると味がよくなりみ入ります。包丁で切ると味がしみにくい。だけど、こういうふうにして、それでいくんです。不格好ですが、そのお魚を大根の上に置いて、タレを置いて炊くとお魚の味がお大根にしみて、すごく味が良くなる。そういう韓国の知恵ですね、ある意味でね。

**仲尾 宏**：ありがとうございます。なんかレシピを直接にコピーしていただいているようで、皆さんメモされましたか。きつと美味しいものができると思います。それから、ここに持って来ていらつしやる『キムチ物語』のことも少しご説明ください。

**李連順**（イ・ヨンスン）：そうですね、ちょうど10年前に。私は学者でもありませんし、作家でもないし。ただ『キムチ物語』はキムチのレシピじゃないんです。在日のキムチを通して、在日の歴史でもあるんです。キムチを通して書くと非常に分かりやすいかな。そんな計算もないんです。ただ、キムチが日本で成長してくれたというんですか。その間には、こういうこういう流れがあつて、日本の方々との出会いもいっぱいあります、私もそういう中で日本の方の素晴らしさと私たちは在日の人の何から何まで知っていますから、そういう良さとか、いろいろあります。今日も持つてまいりましたが、韓国の李御寧（イ・オリョン）先生つて皆さんご存知ですか。『縮み』志向の日本人』をお書きになった李御寧（イ・オリョン）先生つていう方が20代の時に『恨の文化論』を書かれたんです。その先生と35年ぐらいのお付き合いを未だにしています。この本は亡くなった夫が翻訳したんです。『キムチ物語』は絶対に手伝いませんでした。この一つを翻訳してくれたのが私にとって大事で嬉しかったです。そんなことで、今日

お帰りになる時に、どなたかこれとこれを一冊ずつ持って帰っていただいて回し読みをしていただけたら感謝でございます。

それと、この先生と35年お付き合いをしています。在日なんだけど韓国人じゃないですか。だけでも、本国にいる韓国人と1年に二、三回会って、お食事してお付き合いしてきたら「ユウーはほとんど日本人です。」って、なるほどなあ、そりゃそうやわなあって懐石料理が大好きやし、日本の着物の素晴らしさも大好きやし、おもてなしの上手な温泉に行ったら、もう外国なんか行きたくない。本当にね、飛行機に乗ってなんであんなところに行くんやろって。今はテレビでなんでも見せてくれるし、行きたくない。だけでも、北海道から沖縄まで温泉は巡りたい。料理は器から何から全てがきちんとして美しく、あのおもてなしも。そりゃあ、そうやわなあね、キムチを漬けてお商売をして、まだ食べてはいますけど、正直言いますと、やっぱりこっそりと沢庵の美味しいのを探して歩くんですよ、旅行するよね。だから、先生も在日と身近に接してそういうふうに感じられたんだらうなこと、いかに自分がもう日本人だなと。もっとも帰る家はございません。韓国に行つたって、私の座る椅子もありません。もう日本で土になるんです。

**仲尾 宏**：ありがとうございます。この『キムチ物語』は2002年に刊行されて、光村推古書院という京都の出版社です、まだ手に入りますね。それから、李御寧（イー・オリョン）さんの『韓国人の心』は、1997年に13刷が出ています。ベストセラーです。学生社という東京の出版社です。翻訳がテイ・カンパンさん、ご主人ですね。もうひとつ、チョン・ミョンエさんの宣伝ですが、国際交流協会が『本音を聞かせてあなたと仲間の京都暮らし』という京都地域外国人コミュニティ基礎調査の報告書を出されております。これは受付のところにありますので、お帰りの際に手に取っていただきたいと思いますが、最後のほうに、エルファのことが出ておりますので大変参考になると

思います。それでは、ご感想をいくつかいただいていますのでご紹介します。

最初の方、「これからもいろいろな興味ある講演会を続けてほしいと思います。」次の方、「韓国料理が大好きで、今回は身近な食材のお話でとても聞きやすかった。日本も韓国も高齢者問題は同じように大変だなあとつくづく実感した。」実は、今日は韓国の高齢者問題じゃなくって、在日の高齢者問題だったんですけども、韓国も日本と同様に高齢者社会に突入しておりまして、また若い人は核家族、つまり昔のように大家族で両親と一緒に住むということも非常に少なくなっていると聞いております。ですから、高齢者問題は、韓国も日本と同じように大きな社会の課題になっているということは間違いないと思います。もう1人の方のエルファへのご感想、「食に厳しい介護者の要望によりよいサービスを心がけられているのが素晴らしいと感じました。」次は、李連順(リ・レンジュン)さんのほう、「ほし山さんのキムチは本当に有名ですね。韓国の食文化を有名にされた功績は素晴らしいと思います。日本の食文化も有名になるようにもっと頑張らないと。」こういう決意表明です。

今日のご質問は比較的少なく、感想をいくつかいただきました。それで、今日は今年のフォーラムの2回目ですが、来週は20周年という記念の節目なので、事務局のほうで大きなイベントを予定していただいております。新屋英子さんをお招きしてイベントホールで新屋さんの独演会をしていただきます。それに先立って、20周年ということですので、私と、今司会をしていただいております岡村さんの前の担当でありました、ここの職員の鄭昌根(チョン・チャングン)さんと一緒に20年前に「チョゴリときもの」を始めたんですが、この間の成り行きをどのように見てきたかを私がいくつかお尋ねして、皆さんと意思を共通するという時間を少し取っております。それを含めて、来週はお誘いあわせの上、新屋さんの独演会に来ていただけたらと思います。それでは、いつもより少し早く終わりますけれども、あとは事務局にマイクを回しますのでよろしく願います。

司会：本日は2名のパネリストの方、コーディネーターの仲尾先生ありがとうございました。先ほど仲尾先生のほうからのご案内がありました。来週は土曜日になります。時間は同じく2時から4時の予定で、先ほどの内容で進行させていただきます。

写真展のご案内を申し上げますが、皆様と一緒に黙祷をお願い申しあげました大槌町の当時の1ヶ月後から昨年までの写真を何点か二階の回廊で展示しております。お帰りの際はそちらのほうにもぜひ足をお運びいただきましたらありがたく存じます。本日はどうもありがとうございました。

「チョゴリときもの」の20年  
—京都の在日コリアンを中心として—

1982	年金受給に関する国籍条項撤廃。高齢の在日外国人には無年金者が残る。
1986	年金受給に関する制度改正により一部無年金問題は解決。
1989	(財)京都市国際交流協会設立 2012年より(公財)に変更
1991	入管特別法で「特別永住資格制度」発足。 南北コリア 国連同時加盟。 在日保護者による「メアリ会」発足。
1992	第1回「チョゴリときもの」開催。 京都市教育委員会、「外国人教育方針」策定。
1993	外国人登録法上の「指紋押捺義務」廃止。 第1回「東九条マダン」開催。
1994	京都市、国が制度化を図るまでの過渡期的な施策として、外国籍の無年金重度障害者を対象とした給付金の支給開始。 国際交流協会「くらしの中の市民として京都に生きる在日韓国・朝鮮人」発行。 日本「子どもの権利条約」批准
1995	最高裁、永住外国人の地方参政権付与は違憲でないとの判断
1996	日本、一部を留保しつつ「人種差別撤廃条約」を批准
1997	京都市、「国際化推進大綱」を策定
1998	「京都市外国籍市民懇話会」発足。 2010年「京都市多文化施策懇話会」として再発足。
1999	京都市、国が制度化を図るまでの過渡期的な施策として、外国籍の無年金高齢外国籍者に給付金を支給開始。
2001	京都市、京都市職員採用試験(一般事務職・技術職並びに学校事務職)受験資格について、消防職を除く職種で国籍条項を撤廃。(一般事務職および一般技術職における受験対象:永住者・特別永住者)
2000	ピョンヤンで第1回朝鮮半島南北首脳会談開催、共同宣言発表。
2002	FIFA ワールドカップを日韓で共同開催 「拉致問題」公に。北朝鮮は謝罪、日本政府と遺族は全員の帰還を求め続ける。
2003	京都コリアン生活センター「エルファ」がNPO法人として発足。 映画「冬のソナタ」日本上陸などで韓流ブーム起きる。
2004	井筒和幸監督作品「バッチギ」上映
2005	山野車輪「マンガ嫌韓流」刊行、販売
2012	新入管法施行、外国人登録法廃止。特別永住者を対象とする新たな制度と共に、日本籍市民と同じく住民基本台帳法適用。

□ 参考資料「写真で見る在日コリアンの100年」「在日コリアン辞典」他

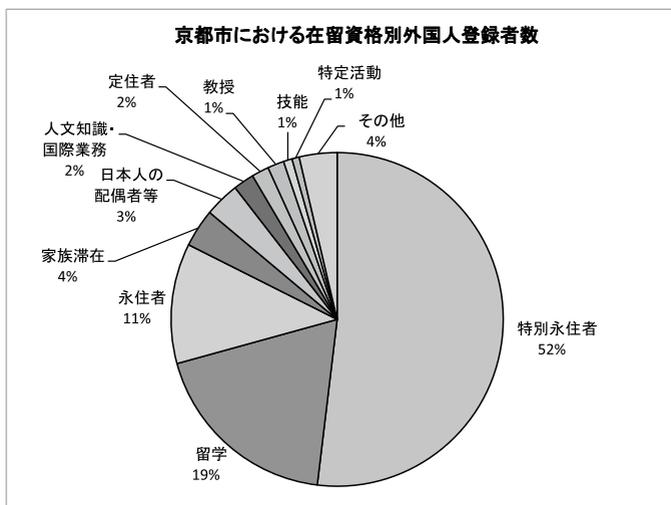
(公財)京都市国際交流協会



京都市における外国籍の住民基本台帳登録者数（平成24年12月末現在）

（単位：人）

在留資格	人数
特別永住者	21,116
留学	7,655
永住者	4,739
家族滞在	1,501
日本人の配偶者等	1,385
人文知識・国際業務	822
定住者	682
教授	649
技能	345
特定活動	288
その他	1,494
総数	40,676



京都市における外国籍の住民基本台帳登録者数(平成24年12月末現在)

単位(人)

国籍(出身地)	登録者数	国籍(出身地)	登録者数	国籍(出身地)	登録者数
韓国	22,121	カンボジア	15	マダニア共和国	3
中国	9,486	キルギス	14	マダガスカル	3
朝鮮	1,882	アルゼンチン	13	ヨルダン	3
米国	951	オーストリア	13	リビア	3
フィリピン	881	ブルガリア	13	東ティモール	3
台湾	665	ラオス	12	アイスランド	2
タイ	369	コロンビア	11	ウルグアイ	2
フランス	358	チェコ	11	エクアドル	2
英国	322	チリ	11	キューバ	2
ベトナム	293	ウズベキスタン	10	スロベニア	2
インドネシア	286	サウジアラビア	10	セルビア	2
インド	248	ケニア	9	セルビア・モンテネグロ	2
オーストラリア	221	ジャマイカ	9	チュニジア	2
ドイツ	200	シリア	9	ニカラグア	2
ネパール	199	ガーナ	8	バーレーン	2
カナダ	196	ナイジェリア	8	ブルキナファソ	2
ブラジル	145	ギリシャ	7	ボツワナ	2
ロシア	136	クロアチア	7	モルドバ	2
マレーシア	116	スーダン	7	ルクセンブルク	2
イタリア	106	トンガ	7	エストニア	1
スウェーデン	81	ノルウェー	7	エルサルバドル	1
スペイン	76	ボリビア	7	オマーン	1
エジプト	73	アゼルバイジャン	6	ガボン	1
モンゴル	71	トルクメニスタン	6	ギニア	1
ペルー	65	ポルトガル	6	キプロス	1
ニュージーランド	64	モロッコ	6	グアテマラ	1
イラン	60	リトアニア	6	クウェート	1
バングラデシュ	48	アンゴラ	5	コスタリカ	1
ミャンマー	41	エチオピア	5	ジブチ	1
スイス	38	スロバキア	5	ジンバブエ	1
メキシコ	38	タンザニア	5	スワジランド	1
シンガポール	36	マリ	5	セーシェル	1
フィンランド	36	アルジェリア	4	ソロモン	1
オランダ	33	イエメン	4	ニジェール	1
スリランカ	32	カメルーン	4	バプアニューギニア	1
ルーマニア	31	グルジア	4	パレスチナ	1
アフガニスタン	29	コンゴ民主共和国	4	ブルネイ	1
ベルギー	29	ザンビア	4	ボスニア・ヘルツェゴビナ	1
トルコ	28	パラグアイ	4	マラウイ	1
ハンガリー	25	ベネズエラ	4	モザンビーク	1
イスラエル	23	ペラルーシ	4	ラトビア	1
ウクライナ	22	イラク	3	リヒテンシュタイン	1
パキスタン	22	ウガンダ	3	レバノン	1
アイルランド	21	カザフスタン	3	無国籍・未確定	27
ポーランド	20	セネガル	3		
デンマーク	16	ドミニカ共和国	3	合計	40,676
南アフリカ共和国	16	ホンジュラス	3		

※「無国籍・未確定」について

日本で出生届が出され、在留資格を取得するまでの間にある子や、パスポート等、国籍を確認する書類をお持ちでない方など

＜参考＞

過去5年間の外国人登録者数

平成19年	41,463
平成20年	41,123
平成21年	41,295
平成22年	41,289
平成23年	41,200

※外国人登録制度は平成24年7月に廃止



第三回

■ 対談「チヨゴリときもの」20年を振り返つて

■ 「チヨゴリときもの」20周年記念

「新屋英子ひとり芝居」身世打鈴「しんせたりよん

対 談 仲尾 宏氏（京都造形芸術大学客員教授）

チヨン・チャンゲン氏（公財）京都市国際交流協会職員）

二〇一三年三月一六日（土） 開催



司会：皆さま、こんにちは。ただいまより「チヨゴリときもの20周年記念公演」を開催いたします。最初に公益財団法人京都市国際交流協会事務局長岩佐仁己よりご挨拶申し上げます。



岩佐 仁己 氏

岩佐仁己：皆さん、こんにちは。このように多数ご来場いただきまして、誠にありがとうございます。「チヨゴリときもの20年を振り返って」ということで、主催者であります京都市国際交流協会を代表いたしまして、ひと言ご挨拶を申し上げます。

まず、私ども京都市国際交流協会でございますけれども、京都市が内外に向けて力強く発信をいたしました世界文化自由都市宣言の具体化を受けまして、1989年（平成元年）に設立されました公益財団法人でございます。今年丸24年を迎えております。そして、数多くの事業を展開しておるわけですが、その中でもいち早く取り組みを始め、今でも重要な事業のひとつとして位置づけておりますのは、この「チヨゴリときもの」の事業でございます。事業を始めてちょうど20年というところですけれども、20年前はどんな状態で今とどれほど違っていたのかというようなことを振り返る時に、いくつかのことが言えるのではないかなというふうな思っております。

その頃は国内経済ということではバブルの崩壊というようなことがこの時期に重なってくるわけですが、それから今日まで、お配りした資料の在日コリアンに関する略年表にございますようないろいろな出来事があったというところでございます。制度として改善をされたこともございますし、まだまだ残された課題も、問題も多くあるというふうなことであります。しかしながら、一方でまた100年を超える在日コリアンの歴史の中で「知ろうとする気

持ち」 「深く理解をしようという気持ち」が依然として弱かったり、あるいは、「これは国際化の問題ではない」というような考え方、意識が日本人に今も根深く、あまり変わってないのではないかとというふうに思います。逆説的に言いますと、ですからこのチョゴリときものは20年間続けてこられたということが言えるかなと思います。協会としては、この事業を必要としない、そういった状況が早く来ることを願っていますけれども、当面続けていかなければならないのかなというふうにも考えているところでございます。

20年とひとくちに申し上げても、立ち上がりからずっとこの事業を続けるということは大変なエネルギーが必要でございます。私ども協会の職員も当初からこの事業に関わっています者はごくわずかということになっておりますけれども、第一回目からコーディネーターとして事業を支えていただきました仲尾先生、またパネリストとしてお話をいただきました在日一世から三世まで、延べ150人を超える皆さん方には心から感謝を申し上げますというふうに思います。仲尾先生はこの後こちらのほうにお出でいただくことになっておりますけれども、あらためて感謝を申し上げたいというふうに思います。

本日20年目の節目として「身世打鈴（シンセタリオン）」の一世の主人公の語り、耳を傾け、皆さんとともに今一度在日の100年を振り返るとともに、これからの私ども京都市国際交流協会に求められる道、方向というものについて考えていきたいと思っております。これまでの多くの皆様のご理解、ご協力、また本日もご来場の皆様方、心より感謝を申し上げます。開会にあたりましてのご挨拶にかえたいと思います。本日は誠にありがとうございます。

司会：では、本日の予定をご紹介します。この後すぐ第一部といたしまして、「チョゴリときものの20年を振り返って」、初回より変わらずコーディネーターを務めていただきました京都造形芸術大学客員教授でいらっしやいます仲尾宏先生と当時の協会の担当職員、鄭 昌根（チョン・チャンゲン）とのお話をお聞きいただきます。

引き続きまして、2時半より新屋英子さんの一人芝居「身世打鈴（シンセタリヨン）」を上演いたします。では、よろしくお願いいたします。



仲尾 宏氏

仲尾 宏：皆さん、こんにちは。先ほど司会の方からご紹介をいただきました仲尾宏でございます。今日は新屋さんの素晴らしい舞台上に先立ちまして、ほんの少し思い出を語らせていただきたいと思ひます。と申しますのは、この「チヨゴリときもの」という催しは在日に関わるいろんな催しの中で非常にユニークな全国にもほとんど例を見ないようなものだと思います。なぜ、そのようなことが始まったのかということを含めて、当初この職員としてチヨン・チャンゲンさんがいろいろ企画し、運営し、いろんな苦勞をしていただきました。そういう中で、実はチヨン・チャンゲンさんは在日の方ではなく、韓国から来られた青年であります。今も青年です（笑）。というわけで、韓国から人が在日という存在がどのように見えたのかというようなことも含めてお話を少し伺いたいと思ひます。

今、日本にはいわゆる在日、日本の植民地統治下で日本に渡つて来た人、あるいは無理やり連れて来られた人が三十数万人居られます。京都市は二万一千人です。京都市でもいちばん多い人口比になっております。1945年日本が敗戦、朝鮮の解放の時には二百万人で、帰られた方が約3分の2、残られた方が約六十万人。そして、その後、世帯を重ねられて、今日三十数万人居ております。そういう在日の方々をそもそも朝鮮半島、韓国でチヨンさんはどのように教えられてきたか、あるいはどのように感じられてきたか、そんなところから、まず伺いたいと思ひます。



チョン・チャングン 氏

て違ったことに気づきました。

チョン・チャングン：はじめまして。チョンと申します。よろしくお願います。私が韓国で教育を受けた時代といえますのは、1980年代でした。当時は、韓国と北朝鮮の対立というのが今よりさらに厳しく、激しい時代でもありまして、学校で受ける教育もそれなりの教育でありまして、反共産的な教育を受けたせいで在日コリアンの方はほとんどが北朝鮮の人々であるという漠然としたイメージを持っておりました。当然在日も韓国人・朝鮮人ですから、ふだん韓国朝鮮語を不自由なく喋れる、家の中は当然ながら韓国の家庭の雰囲気であるというイメージをずっと持つておりましたが、日本に来

また、今はもうなくなっただんですけれども、70年代、80年代の韓国といえますと海外へ行くためのパスポートが発行される時に30分か40分ぐらい義務として教育を受けないといけなかったことがありました。この教育というのは、韓国人がパスポートを持って海外へ出た時に北朝鮮の人、あるいは朝鮮籍の在日の人に会った時はこうしなさいという内容でした。その内容をかすかに覚えているんですけれども、なるべくその場は避けるという教育でした。そういうイメージで日本に来たわけです。

仲尾 宏：ありがとうございます。韓国で、まだ軍事政権が続いていた時代ですね。そして朝鮮戦争の余波もあった時代の厳しい状況でした。さて、日本に来られてこの会館で正職員として仕事に就かれ、そして「チョゴリときもの」を始める段階で在日の方に会われたんじゃないかと思いますが、実際に在日の方に会われてどんな印象でした？

チヨン・チャングン：そうですね、京都に引っ越してきた時に、近所に焼き肉屋さんがありました、夜にご飯を食べようと思ってそこに初めて行ったんですね。夜遅い時間帯でもありまして、客は私ひとりしかいなくて、その店もおばさんがひとりでした。カウンター越しにおばさんが肉を焼いてくれて、私がいただくというような感じだったんですけども、メニューを見るとキムチとかナムルとかありまして、あっ！ひよっと思ひまして、何も考えずにそのおばあさんに、「在日の方ですか？」と聞いたんですね。したら、それを聞いた途端表情が硬くなって、「はい。」と短い返事で、ちよっと気まずいなという空気の中で、「私も実は韓国ソウルから来ました。」と言ったら、「そうですか：」とまた硬い表情になって短い会話しかできなかったんですけども、なんらかの理由があつて在日の方ですかと聞いたことが迷惑だったかなあと感じて、その理由は何だろうと初めて思っただんですね。それが、私が在日コリアンについて初めて興味を持った瞬間だったと思います。焼き肉はとても美味しかったです。また行こうと思いましたが迷惑かなあと感じてそれっきりです。

仲尾 宏：ありがとうございます。さて、そこで、まもなく「チヨゴリときもの」が始まるんですが、これについては、この会館ができた時に当時の理事会の方々や事務局長さんに、やはり国際交流は大事だけれども、京都市に住んでいる外国籍の市民の方々と最大のウェイト、七割以上を占めている在日韓国・朝鮮籍の方々と京都市民の交流ということを柱にする必要があるんじゃないかということを通して上げました。そして、当時の事務局長でありました野島さんという方がそれは



そうだとということで、賛同いただいたんですが、野島さんのもとでチョン・チャンゲンさんがこのフォーラムの担当になりました。その時のことで覚えていることがあればおっしゃってください。

チョン・チャンゲン：国際交流会館に就職して1年目の時でした。事務局長からある日呼び出しがありました。来年国際交流会館がオープンして3周年になると。その記念事業として在日関連のイベントをひとつ企画してみないかと言われました。それまで、事務局長は私にとっては本当に恐い存在で、毎日怒られて、私には鬼のような存在でした。その鬼局長にそう言われたら、もう必死になって怒られないために企画をしました。毎日夜遅くまで企画を練っていたので、おそらく体重が2kgか3kg減ったと思います。これで怒られないだろうというふうに思って提出したら、「こんなじゃない！」と怒られて、「やり直し」と言われて、また企画して持つて行ったら、また「やり直し」と言われて、その繰り返しでした。すると何日かして、鬼局長から呼び出しがあつて言われたことが、「チョン君が考えているいろんなパーツを組み合わせるとこんな形じゃないかなあ。」とおっしゃいながら企画書をまとめたものを私に見せてくれたんですね。それを読んで、ああなるほどなあと思いました。それまで私を含めて日本の皆さんは、在日のことについてはほとんど知らないんじゃないかなあということ、どうしたら、理解しやすくすることができるのかというところから私が考えたのは、専門家の先生を何人か呼んで、学校の授業形式のように専門知識を皆さんに紹介していくということにこだわったんです。鬼局長が考えてくれた企画は、例えば、在日の方が百人いるとすれば、その百人の違う歴史がある、その違う歴史を、人生をなるべく一人一人本人の言葉で語ってもらおう。なおかつ、それを残していく、というような企画でした。それを読んだ時が、今まで私の頭の中に全くなかった発想、そして何がいちばん大事だったのかということを初めて気づかされたきっかけでもありました。

その企画内容に惚れて、次に人探しということがありますが局長の頭の中にはもうその時点から仲尾先生に進行

を頼むというシナリオまで描かれていて、最初に局長と一緒に仲尾先生のもとに行ったのです。20年前の仲尾先生はまだ髪の毛もありまして、ひげも黒かったのですね（笑）。先ほどこっちに来る前に事務所で20年前の写真を見ただすけども、あつという間でしたね。



仲尾 宏：ありがとうございます。そして、「チヨゴリときもの」は始まりました。そのきっかけは、もうひとつ裏話を申し上げますと、それが始まる少し前にこの会館として、あるいは協会として市民の皆さんに在日を知ってもらおうという冊子を作ることになりました。それで、私が編集長をお引き受けしたんですが、それには日本人や在日の方々にも加わっていただきました。最後にタイトルを決めましょうということになった時、ひとりの在日の方が「市民としての在日韓国・朝鮮人」という名前をぜひつけてもらいたいとおっしゃったんです。なぜかという、私たちはなるほど戦後数十年生きてきたけども、市民として扱ってもらってないんじゃないか。あらゆる点で人権が制約されているんじゃないか。そういうことを強く思うということをおっしゃって、私は、それはその通りだということで、即座に同意いたしました。今日よりもっともっと制限されていた時代、差別や偏見のまなざしが強かった時代ですね。20年前は明らかにそうでありました。

そこで、もっと多くの市民に冊子だけではなくて知っていただくには在日の人の「生の声」を聞く機会をつくらうということに結び付いたわけです。それで、「チヨゴリときもの」がスタートいたしました。先ほどチョンさんに聞きましたら161人の方にバネリストとして登場していただいております。なかには、在日の家族になられた日本人の方やニューカマーの方もあるいは日本人の方も少しは入っておられますが、圧倒的多数が在日の方々です。お話

を聞きました。あるいはイベントをしていた方もあります。そういう中でチョンさんがいちばん印象に残っている方、あるいはいちばん印象に残っている企画などがありましたら感想を紹介してください。

チョン・チャンガン：失敗談も含めてなんですけども、「チヨゴリときもの」が始まった当時は今よりもっと日本語が下手で聞き取りも下手で、分からない部分もたくさんあったんですけども。この企画をして人を探す時は、在日の方に、こういう趣旨でしますのでパネリストとして来ていただけますかとひとりひとり依頼をしていくわけなんです。

在日一世の方にお会いした時の話ですけども、職場に近いところですから、私がそこまで迎えに行きますというところで待ち合わせをしたんです。当時は私が京都の地理にあまり詳しくなかった時でして、北のほうの金閣寺の近くを待ち合わせの場所にしました。何時から何時と決めてそこへ行ったらけつきよく会えなくて、当時は今みたいにケータイもあまり普及されていない時代でして、会館に電話をして確認するしかなかったんですね。あとで分かったんですけども、私の聞き取り間違いでその方は銀閣寺とおっしゃっていて、私は「銀」と「金」を区別できなかったのです。今でも時々区別ができません。それは韓国人のいちばん不得意なところなんですけども、発音がたまに区別できない場合があります、間違って私がゴールドの金のほうへ行ってしまうとして大変迷惑をかけたことがあります。その方は理解してくださって、大目に見てくださり、パネリストとして迎えさせていただいたことがあります。今でもお付き合いをしております。

もう1人は、在日韓国三世の大学生がいました。彼といろいろ話しているうちに彼の将来の希望、卒業したら何になりたいという話になった時に、彼が絶対にやりたいことがあると。消防士の仕事がしたいと。そのために身体も鍛えていて、本当にいい身体をしていました。そこまで準備しているならきつと受かるんじゃない。応援しますよと言っ

たのですが、彼から、まだ在日はその仕事には就けないということを初めて聞きまして、後から先生からも勉強させていたただいたんですけれども。今でもなれないことになっていると思うんです。彼が大学を卒業してもう何年も経っているんですけども、今はどうしているのかなと気になるところです。

また、1994年度第三回目の「チョゴリときもの」を企画した時に、在日一世の方にバネリストの依頼をしたら、「韓国から来た若い君に我々が在日の歴史について何が分かるの?」とか、「もうこんなフォーラムは意味がないし何のためにやるの!」とか言われたり、同じ世代の在日の方と話をした時、「日本で生まれて日本語も日本人なみに喋れる。日本文化も分かる。日本の社会的なルールにも慣れている在日はこの国際交流協会の職員になれないのに、なぜ韓国から来たニューカマーのチョンさん、君だけが我々が在日をおいて、この国際交流協会の職員になれたのか。」とか言われたりして、そういった一人一人がぶつけてくれたお話は、私にとっては、この企画をしてよかったと思えました。本当にいい勉強になりました。それを身に着けてこれなかったら私はいつまでも在日のおかれてる現状とか生活とかずっと分からなかったんだらうなあと。ずっと分からずに机に向かうだけで企画をしていたんじゃないかなと思います。そういった方々のおかげで少しだけは分かっているつもりでこの企画をすることができたなと思います。

**仲尾 宏**…この企画を運営していく中での苦労話というよりは、むしろチョンさんがぶつかった在日と日本社会の現実を聞かせていただきました。その他にもいろいろなことがあったと思うんですが、来ていただいた160人のうち一世の方はもうかなりお亡くなりになっている方もおられます。今日本社会で中心的な活動世代というのは二世、それから三世の方ですね。そして子どもたちは四世から五世という人もいると聞いております。世代がどんどん変わっていくわけですが、私もいろんな方々のお話を聞いていると日本人として私が生きてきた道とはかなり違う家族の歴史がある。あるいはその個人の歴史がある、その思いがある、ということを感じさせられております。そのよ

うに歴史的環境が全く異なる人々がこの日本の社会にいて、暮らしておられるということは、逆に日本文化・社会の多様性につながっていると思うんですね。最近ではチヨゴリときものもよく見かけるようになったし、韓国舞踊や映画もよく目にするようになったわけですが、韓国映画は別にしまして、そんな韓国・朝鮮の文化を背負っている方がおられて、日本あるいは京都の文化の一翼を担っておられるということであらためて痛感しております。

今後も世代は変わっていきますが、そのような歴史を背負った在日の方々が日本で生きていかれるわけですが、これからの在日の方々に対してチヨンさんはひとりの韓国人としてどのような生き方をされることを期待されるというのはちょっと変ですけれども、どのように生きていかれたらいいのではないか、あるいは日本人は、日本社会は在日の方々をどのように受け入れたらいいのかということについて感想があれば短くおっしゃってください。

チヨン・チャンゲン：我々ニューカマーは自分なりの希望として日韓あるいは韓日の架け橋になりたいと、「架け橋」という言葉をよく使います。それが韓国で生まれて育てられて教育を受けた我々から言ったら、韓国からの体面であるとか主張とか文化というのは分かるのですが、両国を知って活動できる架け橋には、とてもとても無理があります。そう考えると、在日を持っている力というのは、私たちが持っている力には及ばない本場に大きな力を持っている存在じゃないかなと思います。さらに、在日の方が今関心とか興味を持っている韓国については、楽しいこととはたくさんあると思うんですね。先ほどおっしゃったドラマとか食べ物とか。それにもう一步踏み込んで、在日の方が韓国の政治であるとか、経済であるとか興味を持って、知ろうと思つて勉強していただければ、今までより以上にさらに大きな力を蓄えて、今世紀では韓国と日本の間には解決が難しい懸案とかたくさんあると思うんですが、それはお互いの主張が強すぎるので解決が難しいと思うんですけども、その大きな力をもっと発揮していただければ、韓国の文化も日本の文化も、韓国の良いところ、悪いところ、日本の良いところ、悪いところを知っている在日です。

たら、韓国あるいは日本が提示できない、考えられない懸案について解決に向けて、解決に近いならかの提案ができるんじゃないかなと思います。今すぐには難しいかもしれないんですけども、今後そういった時代が来たらいいなと個人的に思います。

**仲尾 宏**：時間が来てしまいましたので、これで終わりますけれども、チョンさんが言われたように、今竹島（独島）問題が日韓のネックになっていることですが、素晴らしいこともあるんです。例えば、韓国では「外国人処遇基本法」という法律ができて、韓国にいる外国人の人権が明確に保障されるようになりました。ここ十数年のことです。それに比べると日本は逆に遅れているんじゃないかという事実もございます。そんなことも含めて在日の方々、日本社会でこれから暮らしていける方々と日本人、あるいは韓国から来られた方が何が問題で、何をどのように見ていったらいいのか。そういう機会がこれからも続くことを期待したいと思えます。

先ほど事務局長も協会としても引き続きこのフォーラムは進んで続けていこうということをおっしゃいました。私のも力のある限り協力をさせていただきたいと思っております。また、皆さんからもご意見を伺ってよりよい「チョゴリときもの」の第2セッションに持つていきたいと思えますのでよろしくお願いします。どうもありがとうございます。

**司会**：ありがとうございます。当時の様子、始まった時からのこと、思い出、そして今後に期待すること、願いなどお話しいただきました。先ほどご紹介のありました本ですが、『暮らしの中の市民として』副題としまして「京都に生きる在日韓国・朝鮮人」、この冊子を受付に用意しております。ご興味がある方がいらっしゃいましたら、本日に特別に半額にさせていただいておりますのでお手にとらせていただけたらと思います。

最初の挨拶にもございましたが、在日コリアンの歴史は100年になります。植民地時代、それから戦後数々の理由で日本を住まいとして選択された方々、その時間といえますのは、コリアン社会の時間であるとともに、まさしくそれを内包しています日本社会の時間でもあります。本日もご覧いただきますひとり芝居は、ちょうどこのフォーラムが始まったところが舞台です。20年ぐらい前。正確に言いますと23年前、1990年が舞台になっております。主人公は1910年生まれです。これは明治43年になります。第二次世界大戦が始まりましたのが1941年（昭和16年）、終戦が45年（昭和20年）になります。戦前で、昭和15年以前に15歳の時に初めて日本に来たという設定の80歳の在日一世が主人公になっています。ちなみにこの方が今いらっしゃいましたら103歳になられています。

新屋さんは40年間でこのお芝居を二千回以上上演されておりまして、来月大阪では40周年記念の公演がございます。お手元の資料の中にも入れさせていただいておりますので、ご興味のおありの方にご紹介いただければと思っております。もともと20分ぐらいのお芝居で大阪の喫茶店で作られ、脚本も全部新屋さんがされています。これを百回、五百回、千回と重ねるうちに本日観ていただきます約1時間20分のお芝居となりました。実際在日のご婦人方にお話を聞かれて、民謡、民話、歴史、言葉なども勉強されて、今の形になっています。

では、新屋英子さんのひとり芝居『身世打鈴（シンセタリヨン）』をお楽しみください。





「チヨゴリときもの」二〇周年によせて

# 寄稿文



## マイノリティの星

京都市立東山開晴館 李 大佑（リ・デウ）

No. 6 (1996/3)

連続フォーラム「チヨゴリときもの」に参加して、もうすぐ十五年が経つ。この間に、公立校の教員になるという夢を私は叶えた。十五年前、このフォーラムで宣言した通りに。

夢を叶えるまでの道程で、たくさんの人に支えていただいた。励ましてもらったり、勇気づけてもらったり、具体的な助言をいただいたり。ここで書ききることができないほど、たくさんの人に支えられて叶えた夢だ。マイノリティである私を支えてくれたのは、マジョリテイである日本人の方や、日本人のマイノリティの方や、マイノリティである外国籍住民の方々である。様々な立場の方に支えられてここまでできたのだ。

そして、今、教壇に立つ私の目の前には、厳しい社会的立場の子ども達がいる。どんな立場、背景であっても共通していることがある。それは、前途多難であるということだ。幼い背中には大きさに違いこそあれ、それぞれ苦勞を背負わされている。そんな子ども達に私は、これからいつまでも全力で向き合っていきたい。一人一人に向き合うことが、将来、その子達が様々な困難に向き合わなければいけなくなるときに、きっと力と希望の源泉になると信じているからだ。

また、私はこれまで、多くの出会いに恵まれてもきた。その中でも、ラグビーというスポーツとの出会いが私にとって大変大きかった。ラグビーを通じて、友情や感動の素晴らしさを実感することができた。尊敬できる多くの仲間、恩師に出会うこともできた。生きるうえで目の標や夢を与えてもらった。ラグビーが私の人生の扉を開けてくれた。だから、次は、私が子どもたち一人一人を扉の前まで連れて行く役目をしたい。そして、その扉を開くために必要

な、努力することや前向きに生きることの重要性を伝えたい。

最後に、これからいつまでも、堂々と胸を張って教壇に立ち続けたい。

そして「あんな生き方をしたい」「あの人もがんばってるから自分もがんばれる」と思ってもらえるような、マイノリティの星に、いつかなりたい。

## 差別と排除のない社会を

呉 鳴 夢 (オ・ミョンモン)

No. 8 (2001/3)

私が連続フォーラム「チヨゴリときもの」のスピーチ「祖国を思う」に参加した2001年3月は、2000年6月に平壤で行われた南北首脳会談により、祖国統一実現の里程碑である

6・15共同宣言が出され、海外に住む同胞たちにも夢と希望を与えてくれた時だった。

あれから12年の歳月が流れ、私たちの願いに反して、情勢はかんばしくない。朝鮮の統一が前進すると共に東アジアの平和と安定し繁栄がくると思わせたが、朝鮮半島で南北関係は緊張しており、日本は朝鮮を敵視し韓国との関係もよくない。

朝鮮半島の状況を反映してか東京の新大久保や大阪の鶴橋で、「朝鮮人を叩き出せ」とヘイトスピーチやヘイトデ

モが繰り返されており、京都朝鮮第一初級学校でも同様な事があり心を痛めている。

また「売春ババア殺せ、チョン斬れ」と歌う日本のバンドの歌詞に驚く。そのCDが韓国の元日本軍慰安婦に送りつけられたという。国連の社会権規約委員会は、こうしたヘイト（憎悪）の横行、元慰安婦をおとしめる行為を止めさせることを日本政府に求めた。当然である。このようなヘイトを叫ぶ人々は「自分たちには権力の盾がある」と感じてゐるからだ。

こうした世相の背景には過去の日本のアジア侵略を否定する一部政治家の無責任な言動がある。拉致はあつてはならないことであるが、日本政府は拉致問題などを結び付けて朝鮮学校を高校無償化対象から除外している。こうした姿勢が彼らを「権力の側」を意識させてゐる。

最近採択された特別秘密保護法は外国人差別をさらに増長させる危険がある。同法による「適正評価」は秘密を扱う人の配偶者や両親らの国籍も調査の対象にしている。まさに人種差別である。外国籍住民が大衆からも国家からも攻撃される対象になりかねない。

このような杞憂は関東大震災にみられる。1923年の関東大震災のときに「朝鮮人が井戸に毒を入れた」というデマを流布させ6000人も朝鮮人が無残にも虐殺された。デマの発信元は軍部による国家犯罪だった。

さる5月19日、京都朝鮮初級学校新校舎竣工式が伏見区小栗栖で行われた。日本の来賓から暖かいメッセージがあつた。門川京都市長は「未来の輝かしい主人公となるためにしっかり学び、日本人とみんな手を取り合つていこう」と励ました。生徒たちは真剣に話を聞いていたのが印象的だった。この子どもたちは日本に住み民族自主精神をもつた外国人として日本社会や国際社会で立派に社会貢献をしていくことだろう。

私は親の代からすればここ京都市に90年以上住んでいる。子供の頃は皇国少年の教育をうけ虐待と蔑視の中で暮らし、戦後は少なからず差別の中で生きてきた。

私たち外国人は差別と排除のない相互理解、相互尊重、共栄共存の社会を願っている。

京都市が掲げる多文化共生の理念がより深化され実生活に結びつくことを願い、またの機会があれば皆さんと一緒に語りたい。関係者のみなさんご苦労さまです。(以上)

劉 仙姫 (ユウ・ソンヒ)

No. 12 (2005/3)

No. 18 (2011/3)

連続フォーラム「チヨゴリときもの」に二度もパネリストとして参加させていただいた貴重な経験を今も忘れることができません。

京都市に住んでいる外国人として、子どもを育てる母として、国際政治を研究する一人の研究者として非常に有益であり、勉強させていただく内容ばかりでした。

最近の日韓関係があまり親密ではない中で、同フォーラムの意味合いを改めて感じる毎日です。

政治的な問題が焦点化される度に、私は思います。それにもかかわらず、前に進むしかない!

共に生きる地球社会、地域社会を作り出すためには、お互いが社会的文化的に理解しあうべきであり、そこそが平和的共存への近道であると考えております。

こうした観点からも、同フォーラムには今後もさらなる発展が望まれます。

## 『平和と共生を紡ぎ続ける道へ』

孫 美幸 (ソン・ミヘン)

No. 12 (2005/2)

No. 18 (2011/3)

私はこれまで『チヨゴリときもの』のフォーラムに過去二回(二〇〇五年と二〇一一年)、パネリストとして参加した。久しぶりに当時の記録に目を通して見ると、当時と現在で変わったこと、変わっていないことを改めて確認できたような気がした。

二〇〇五年は、私が三〇歳の頃、四年間勤めていた公立中学校の教員生活を終え、結婚したパートナーとの新しい生活や大学院での研究を始めてちょうど一年が経とうとしていた頃だった。そして二〇一一年は、私が三十六歳の頃、大学院を修了し、研究員としての生活と二人の子どもの出産や育児に奔走している頃だった。

この八年間で変わったことの一つは家族である。フォーラムでも話したがわが家の祭祀(チェサ)だが、それを長年取り仕切っていた祖母が亡くなった。祖母はもう祭祀の対象となってしまう。両親は年齢を重ね、外出の機会が減り、入院することも度々増えてきた。一九八〇年代に認められた外国籍の人々への国民年金の加入であったが、自営業の父親は当時すでに四〇代になっていたこともあり、今から加入してもらえない年金は微々たるものとわかっていたので加入しなかった。国際条項の壁を改めて感じながら、年金がない状態の高齢の両親を世話していくということが現実味を帯びてきた。二〇〇八年と二〇一〇年には長男と長女が生まれた。フォーラムの頃、韓国語と日本語の音に悩みながら名付けをしたと話した二人は、その後スクスクと成長し、現在三歳と五歳になった。ぐずったり甘え

たりしながら、元気に保育園に通っている。二〇一一年のフォーラムの一週間後に起きた東日本大震災では、夫の故郷仙台の風景や人々の生活を一変させた。親戚の中には津波で自宅を流された人もいたが、命だけは全員なんとか取り留めた。それは、今後の生き方を考え直す重要な機会となり、夫は転職を決意した。そしてこの春からずっとやりたかった家具職人の道を歩み始めた。

そして三十九歳になった私は、そんな家族の中で変わらず研究員として、日本や韓国の平和教育や多文化共生教育をテーマに、悩みながら研究を続けている。そして、変わらず、子供たちから多くを学んでいる。講演や授業の先々で出会う中学生や高校生、大学生たちから『孫さんはピースメーカー』と激励されることもあれば、『正直在日コリアンとか歴史のこととか他人ごとやと思ってる』と発言され、自分の力不足を感じさせられることもある。しかし、その出会いや発言が私の生きていこうとする力に、エネルギーを注いでくれていることは間違いない。

また、私のもとに生まれてきてくれた二人の子どもたちも常に私に多くのことを教えてくれる。二〇一二年に領土問題で日本と韓国が緊張関係となった時、叔母のいる釜山に行こうとしていた私たちに、「今韓国に行っても大丈夫？」と周囲のいろんな人が心配した。でも、そんな中大人たちの喧騒をよそに、平和を紡いでいたのは子どもたちであった。四歳だった長男は、少しずつ練習していた韓国語のあいさつ言葉を覚えては、保育園のお友達に小さな韓国語教室を開いていた。「おかあちゃん、アンニョンハセヨとあともっとおしえて。おともだちの○○ちゃんはじょうずやったわ」と、毎日のように報告してくれた。

今年是我的研究のフィールドワークの一環として沖縄に行く機会があった。子どもたちも一緒に行ったのだが、その発言にいつも頭がさがる思いがした。「おかあちゃん、おきなわのセミは、きょうとと、ぜんぜんなきかたがちがう」と言ったのは、五歳になった長男だった。沖縄、琉球列島の動植物はその地理的な環境から独特で多様である。一般的に日本で「ニイニイゼミ」といわれている種類がいるのは、沖縄本島北部まで。南下すれば、「クロイワニイニイ」

「ミヤコニイニイ」「イシガキニイニイ」と種類も変わっていく。五感の使い方を忘れ、視覚ばかりに頼りがちな私は、博物館の説明文でそれをやっとなり理解していた。しかし、子どもは五感をフルに使い、その鳴き声一つでセミの多様性を言い現すことができた。

また、ひめゆり平和祈念資料館を訪れた時、その入り口から緊張していた三歳の長女はその雰囲気になんて耐えきれず、私と父親が交代ですっと抱っここのまま見学することになった。最後の部屋に来た時、長女は「もういやだ！はやくここからでたい！くらいし、こわいー！」と泣き叫んだ。仕方なく父親が子どもたちを連れ、先に資料館を出た。彼女が泣き叫んだ最後の部屋、そこにはひめゆり学徒隊の女学生たちが隠れた地下壕の復元モデルがあった。復元モデルとはいえ、深く暗い地下壕の様子に言葉をなくした。ここで負傷した兵士たちを戦火の中必死で介抱していた女学生たちがいた。負傷した兵士の傷口からウジ虫がわくのをなんとか取り除こうとしたり、動けない兵士の小便をコップに入れ砲撃がやむ深夜の間に壕の外へ捨てたりした。その部屋では、地下壕の周りに亡くなった女学生や引率した教師の何十枚という写真が飾られていた。亡くなった時の最後の様子、「手榴弾で自決」「負傷して壕におきざりにされる」「行方不明」などが書かれ、生き残った人たちから当時のクラスメートの人となり、「やさしい人だった」「かわいらしい人だった」などが添えられていた。そのメッセージが、確かに一人ひとりがあるように生きていたという実感をさらに強めるものとなっていた。その部屋で、文字は何も読めない三歳の長女でも、その暗さと恐ろしさを全身で感じていたのだろう。

沖繩平和祈念公園に行くと、修学旅行で他府県からきた高校生たちに出会った。平和の礎の先に広がる、岸壁と海を背景に、たくさんの方の高校生たちが笑顔で写真に収まっていた。しかし、その中に、この岸壁で起こったことをどれだけの学生たちが想像していただろうか。陸地からは迫りくる戦火、海からは米軍艦隊、空からは砲撃の嵐、そしてその状況に絶望した人たちが、この岸壁から身を投げたり、手榴弾で自決したりした……。私は、とてもこの風景をバツ

クに、笑顔でピースしながら写真を撮る気にはなれなかった。修学旅行も一種の平和学習の機会であるが、その難しさ、他者の立場を想像するということが、全身で学ぶということを考えさせられた旅でもあった。

今後も多くの子どもたちから学びながら、私のライフワーク、さまざまな背景をもった人びとが共に生きることができる平和な社会をめざして、仕事や活動を続けていきたい。そして、私自身が、さまざまな人びとに元氣や榮養をあたえることができる存在になれば、大変幸せである。この「チョゴリときもの」の連続フォーラムも、日本と朝鮮半島、多様な文化背景をもつ人々を結ぶ、貴重な機会であり続けてほしい。

## 朝鮮半島との架橋を願う

— 連続フォーラム「チョゴリときもの」20周年を迎えて —

韓 丘庸（ハン・グヨン）

No. 13（2006／3）

歲月は流水の如しとか、光陰矢の如しとか言うが、連続フォーラム「チョゴリときもの」が20周年を迎えたということは、いかに息長く、そして着実に成果を上げてきたかということの実績であり、まさに継続することが歴史であり、力であると言われる所以でもあろうか。

わたしが連続フォーラムの「チョゴリときもの」に関わったのは、「在日の百年、60年、40年」の二回目のパネラーとして2006年3月3日に参加させて頂き、「8・15と戦後史」というテーマで解放前後の体験談を話したことが

初めである。その時は余り上手には話せなくて、恥ずかしい思いをしたことを覚えている。

丁度わたしはそのころ、2003年から京都市国際交流協会がスタートさせた「コリアサロン・めあり」のハンゲル講座を担当していた。

この「めあり」（朝鮮・韓国語では〈こだま〉）という意味）は、協会が朝鮮総聯京都府本部と韓国民団京都府本部との三者で始めた共同文化事業で、ハンゲル講座を始め朝鮮・韓国関係史セミナー、在日コリアンの歴史と文化、それに纏わるゆかりのある史跡めぐり、映画鑑賞や料理教室等々、一般市民との多彩な交流により大きな足跡を残した。今日まで10年間、「めあり」のハンゲル講座に関わってきたことと合わせて考えるとまことに感無量である。

「チヨゴリときもの」も「めあり」共々厳しい朝鮮半島情勢を背負いながらも、日本市民が在日同胞と思想信条を超えて交流を促進させ、相互理解を深めてきたという事業は、日本全国のどの地域にもない画期的な「活動」であると胸を張って言えるだろう。

三者が足並みそろえて、異文化共生に向かって進んでいく姿を見て会館を訪れる多くの人々が今も声援を送っている。

京都市国際交流会館の「めあり」でのハンゲルを学んだ受講生たちが、その後韓国の延世大学に留学したり、朝鮮・韓国の文学作品を紹介する翻訳者になったり、ハンゲル検定に合格して通訳ガイドで活躍しているなどと噂を聞かされると、微力ながら長年携わってきたことが「無」ではなかったと今も誇りに思う。

しかし、今年内外ともに激動の年であった。世界情勢はもちろんのこと、朝鮮半島情勢も大きく変容し始めた。日本の国内情勢も益々厳しさを増してきた。現政権は発足するや、憲法改正をはじめ、特別秘密保護法強行、国家安全保障戦略、国防軍の創設など戦時国家体制作りを急ピッチで推し進めてきている。おまけに在日に向けては、「高校無償化」制度から「朝鮮学校」を排除する方針が打ち出され、各都道府県の自治体がそろって補助金を打ち切るな

ど、排外的な動きが顕在化し、政治家による粗悪な暴言も飛び出した。

その一方で、東京の新大久保や大阪の生野では「朝鮮人出て行け!」「朝鮮人を殺せ!」などと、屈辱的な暴言を吐きながらデモを繰り返すヘイトクライム、ヘイトスピーチの激しさの増幅を見ると、日本社会の右傾化や反動化に憂慮せざるを得なくなった。

わたしたちは精一杯朝鮮半島との真の善隣友好を進めようと努力している。連続フォーラム「チョゴリときもの」もその一つである。

わたしたちの活動に水を差すこうした社会の情勢に目をつぶってはいけないし、今まで一生懸命培ったわたしたちの文化的「財富」を潰させてはいけないと思う。

殊に京都から発信する連続フォーラム「チョゴリときもの」は、これからも不穏な社会の荒波に抗して行かねばならない厳しい「闘い」の活動の場になるのではないだろうか。

今後もこの講座が時流に阿ることなく益々発展し、朝鮮半島と日本との大きな架け橋の一助になると共に、21世紀最後の分断国家と言われる朝鮮半島の平和的統一に向けて、小さくても大きな礎になるものと確信している。

20周年を心からお祝い申し上げます。

河 東吉 (ハ・ドンギル)

No. 14 (2007/3)

連続フォーラム「チョゴリときもの」が二十年目を迎えられるとのこと、お祝い申し上げます。

参加当時、私は在日高齢者のための福祉事業に従事しておりましたが、二〇〇七年からは京都国際中学高等学校の校長をしております。

在日の高齢者からこどもたちへと関わりの対象が変わりましたが、在日のための仕事にはわかりありません。ダブルのこどもがふえてゆく中で、韓国・朝鮮と日本のことを一定、理解したうえで、生徒と教師にかかわっています。日本を抜け出て韓国へ留学したことにより、現在の仕事が可能だと思えます。若い世代にみ日本から大きく羽ばたくことをすすめています。

みなさまのご健康と事業の一層のご隆盛を祈念いたします。

金 勇 樹 (キム・ヨンス)

No. 14 (2007/2)

私は、2007年3月2日に実施された連続フォーラム「チヨゴリときもの」No. 14「在日の教育と進路」の第三回にパネリストとしてお話させて頂きました。

題材が、「私の子どものころー在日の子どもと日本の学校ー」ということで、当時、まだ大学3年生でした私としては、まだ子どもから脱却も出来ていない、若輩者が話して良いのか不安を持ちながらお話させて頂いた記憶があります。

また、文章をHPにて確認すると、まだまだ話し慣れが出来ておらず、真意が伝わったのか。お恥ずかしい限りです。当時は、大学3回生の就活中でしたので、それ以降のお話を記載致します。無事に目指しておりましたITベンチャー企業に就職をし、東京へ行くことになりました。

しかし、下記理由にて入社間もなく、退職し、現在は別のIT系企業にて仕事をしております。理由としては、金勇樹（キム・ヨンス）で就職をし、企業に入ったことで、差別を受けました。

営業職でしたので、ある程度体育会系のように厳しい指導の下業務に取り組んでおりましたが、ある時上司が罵倒、暴力に走り、拳句の果てには、差別発言をオフィス全体に聞こえるように話されておりました。更には上席の役員、部長職がフォローするも、私が潰れてしまいました。正直社会をなめており、我慢も足りなかったのかと現在は思います。現職では、500名弱の企業にてある程度の役職を持ちながら、営業／管理職として仕事をしております。東京には、1社目の企業から数え5年強おり、現在は現職の支社立ち上げ及び責任者として関西に戻って参りました。

未だに、<sup>な</sup>変な名前ですね！<sup>ッ</sup> 異国の人とは会話したくない<sup>ッ</sup> などとも言われますし、名前を理由に、お付き合い出来ない企業、団体も有ります。

パネリストとして同席させて頂きましたバクさんのお話が痛く、深く理解できたことも多くありましたが、やはりもともと在日外国人、コリアンのことを知ってほしいという思いは強いため、現在でも金勇樹という名前で仕事をしております。

また、東京の頃も、現在も「学生会」では学生、生徒を指導する立場で携わっており、教育もさら変わった

と感じます。

東京（23区内）では、人権担当の先生が各学校にいない。社会の先生が在日、外国人に興味がない。正直驚きが大きかったですが、それが現実なのかと思いました。

その現実もまだまだ十分に見られていない若輩者ではありますが、今後も自分自身を利用し、後世に残せる活動は続けて行きます。

## 祝20回 「チヨゴリときもの」

栗山 千代美

No. 15 (2008/2)

2007年のフォーラムに縁あって参加させていただいてから6年間で経過しました。

その6年間に私の身辺に起こった様々な出来事を紹介したいと思います。2005年より始まった、京都朝鮮第二初級学校保健室での活動は、2012年まで継続しました。その間に、韓国訪問は10回を数え、新たに出会った方々との交流も深まり、2009年10年の2回にわたり、韓国論山市の伝統文化音楽団「クンテゴウル」の一団を招聘し、初級学校や他での演奏会や交流会を開催しました。

また、2013年度には、京都で活動されている韓国茶道教室と亀岡の茶道教室とのお稽古の交流会を重ねたりと、濃厚に理解と親善を深める活動をしています。そして去る11月24日（日）には都メッセから平安神宮まで、「チヨゴ

りときもの」パレードに参加しました。その時まさに「チョゴリときも」のもつ民間パワーが見事に融和し、あたたかでなごやかな世界を実現させました。

アジアは一つ、日本人にとつても、在日コリアンにとつても互いに豊かで住みよい真の国際社会をめざして、一歩、手をつないで進んでいるのをまさに実感しています。

民間パワーこそ歴史を変えうるのではないでしょうか。

## 「チョゴリときもの」に参加して

李裕淑（イ・ユスク）

No. 18 (2011/2)

私は連続フォーラム「チョゴリときもの」にパネリストとして2011年に参加させていただきました。小倉紀蔵先生の研究室の忘年会で京都市国際交流協会の岡村さんと出会ったのがきっかけでした。

その時のテーマは「在日コリアンの視点とニューカマーの視点」でした。20世紀に入り、世界中で人口と資本の移動が活発になりました。日本にもいろんな国から渡日する人が増えました。韓国からも新しく渡日してくる人が増え、便宜上1952年以降にやってきた人をニューカマーと呼び、それまで日本に住んでいた「在日」をオールドカマーと呼ぶようになりました。それぞれの視点について考えようという企画でした。

私が参加したのは第1回「韓流ブームと在日コリアン」でした。その当時は「韓流ブーム」と言われて韓国ドラマやK-POPがとても流行っていました。

その影響もあって韓国語を学ぶ人、韓国に観光に行く人、韓国料理も人気が出て、新大久保や鶴橋にもぎわい社会現象になっていました。

少しずつ韓国の文化や歴史を学ぶことで親しみをもってくれる人が増えてきた時期だと思います。この機運が一度性で終わらず広がっていった、そして在日コリアンに対しても理解していただけたらと期待していました。

しかし、その時にも話題に上がりましたが「在特会」は鶴橋の街頭デモを行い「南京大虐殺でなくて鶴橋大虐殺を行いましょう」と大声で叫んだりしています。鶴橋に住む若い韓国人女性はそのような光景を見ると恐怖を感じるといいます。

以前から拉致問題や核問題で北朝鮮との関係は良くなかったのですが、最近は領土問題や安倍首相の靖国参拝から中国や韓国政府との関係も難しくなっています。私たち日本に住む在日コリアンにとっては複雑な気持ちです。

このように日本と朝鮮半島と「在日」を取り巻く環境は不安定です。だからこそ、マイノリティである在日コリアンが現在も置かれている日本での法的立場や諸権利の問題、在日がどのような思いで生きているかという声を真摯に聞いて共に理解して行こうというこのフォーラムはとても意義があると思います。

在日の立場からみても、今年で20年を迎えるこのフォーラムの冊子は在日の20年の声でもあります。手元にある冊子を読み返しますと、その年ごとの「在日」を取り巻いた問題を取り上げた貴重な本だと思えます。今は聞けない在日1世たちの思いや、私たち2世、3世の思いが書いてありました。とても貴重なものだと思いました。このフォーラムがこれからもっと回を重ねていくことを願います。



## 「チヨゴリときもの」あとがき

1992年に開始した「チヨゴリときもの」は今年20回を迎えました。20年間で160名以上の方からお話いただいたことになりました。

その時代時代に直接語られた言葉は、日本社会にとって、大多数を占める日本人にとって、今もこれからも価値あるものとなることは疑う余地がありません。

今年の第1日目と2日目は、パネリスト各自のテーマでお話いただき、最終日には、一人の女性の半世紀を描いた新屋英子さんのひとり芝居「身世打鈴」を観ていただきました。また、同時開催の写真展「東九条」では、在日コリアンが多く住まう東九条の時の流れを改めて確認いただき、初めてご覧いただく方には在日コリアンの歴史に理解を深めていただくきっかけとなることを願いました。

この20年で特別永住者の指紋押捺制度が廃止され、無年金高齢外国籍者への給付金支給開始、公務員採用試験においては消防職を除く職種で国籍条項が撤廃されました。そして2012年には外国人登録法が廃止され、日本籍市民と同じく、住民基本台帳法が適用されました。他にも未だ多くの法律の壁は残っていますが、一つづつ開かれていく痕跡をみるることができます。

しかし、確実に無理解やその結果である差別は存在します。その誤解を解いていくために、20回を迎えた新たにこの課題を見つめ続けて行きたいと思っています。

発行に当たり、パネリストの皆様およびコーディネーター、報道写真家中山和弘様、写真をお借りしました地域・多文化ネットワークセンターの皆様にご感謝申し上げます。

ありがとうございました。

(公財) 京都市国際交流協会

事業課

岡村敦子

木林愛美

---

アジアの風文庫 29

「チョゴリときもの」

在日コリアンの過去・現在・未来

2014年2月 第1刷発行

編集・発行 公益財団法人 京都市交際交流協会

〒606-8536 京都市左京区粟田口鳥井町2の1

TEL.075-752-3010

印刷 古都亀井印刷株式会社

---